古代における仏塔の伝播

—ボロブドゥールと奈良頭塔の関係について—

坂井　隆

1　はじめに　　2　頭塔と関連遺構のあり方　　3　塔型建築物の伝播　　4　ボロブドゥールの位置　　5　インドネシアの石積基壇遺構　　6　アジア東部の古代海上交流と仏教伝播　　7　まとめ—交流の意味

論文要旨

奈良時代の特殊塔と言われる奈良市頭塔・堺市大野寺土塔・岡山県熊山石積遺構は、いずれも水平方向を強調する階段状ピラミッドの形態を呈して内部空間を持たず、通常の日本での仏塔のイメージとは大きく異なっている。しかし頭塔には数多くの仏像レリーフが配置されるなど、仏教と密接な関係にあることは確かである。本稿は、この特殊塔の起源を考察したものである。

仏塔は紀元前３世紀にインドで生まれ、仏像誕生以前の仏教徒にとって中心的な礼拝対象だった。最古のサーンチー塔のように、その形態は半球形を中心とし、周囲を巡る礼拝を前提として築造された。その後仏教の各地への伝播の中で、それぞれの地域で仏塔の形態は多様な姿を見せる。

インドネシアのボロブドゥールは世界最大の仏教遺構と言われ、シャイレンドラ王朝の下で８ 世紀後半から半世紀以上かけて築かれた。そこに現された多数の仏像やレリーフは、スリランカや東インドで発達した華厳経や密教の要素を示している。

しかしボロブドゥールの階段状ピラミッド形態はインドやスリランカでは見出されず、また同様の仏塔は東南アジアでもボロブドゥールが最古である。だが似たものは、巨石文化の山岳信仰から誕生した在来の石積基壇遺構に見ることができる。ボロブドゥールは、それを仏教的に飾りたてた巨大遺構だった。

唐での華厳宗の成立や密教の確立には、東南アジア経由で旅行した僧侶たちが重要な役割を果している。そのため奈良で栄えた華厳宗・密教には、インドネシア在来の山岳信仰が混入した可能性が高い。本稿では、その過程で生じたボロブドゥールと頭塔などの類似を検討し、遠距離文化接触の興味深い具体像を明らかにしたい。

キーワード

対象時代：古代

対象地域：インドネシア、日本、韓国

研究対象：ボロブドゥール、仏塔、階段状ピラミッド

1　はじめに

（1）　論及課題と方法

本論は、奈良市に残る特異な仏塔[1]である頭塔と、世界遺産であるインドネシアのボロブドゥール(Borobudur)遺跡の関係について、インドネシアでの研究を踏まえての検討を目的とする。

頭塔は類似遺構の大阪府堺市大野寺土塔そして岡山県の熊山石積遺構と共に、日本では極めて少ない階段状ピラミッド型の仏塔である。日本の仏塔研究でも例外的に分類されることが多く、早くからボロブドゥールとの類似が指摘されていた。だが多くの比較研究は、ボロブドゥール自体のアジアの仏塔変遷での位置を言及しなかったため、十分に理解されたわけではなかった。

本論ではインドネシアの巨石文化で生まれた石積基壇遺構との関係で、ボロブドゥールの位置を明らかにしたい。また南伝仏教と東アジアの関係にも言及したい。

頭塔・大野寺土塔は発掘調査がなされ、また熊山石積遺構も修復調査が行われている。しかしボロブドゥールなどでは、発掘調査や出土遺物の研究は全く進んではいない。そのため考古学的方法での年代比較は限界があり、建築史や仏教史も含めた方法で検討を行なう。

（2）　先行研究

本論に関係する先行研究は、頭塔などの研究とボロブドゥールの研究に分けられる。

1）頭塔などの研究

仏教建築史の仏塔研究は、20 世紀初頭以来伊東忠太（伊東 1900)、関野貞（関野 1922)、村田次郎（村田 1989）や足立康（足立 1987）によってなされてきた。仏教史でのインド仏塔研究は、杉本卓洲（杉本 1993,2007）が顕著である。また石田茂作は仏教考古学での仏塔研究を発展させた（石田 1969)。アジアの仏塔の総合的な研究は、斉藤忠が長年行っている（斉藤 2002)。中でも仏塔の系統をまとめた展開はまとまっており、また頭塔などについては日本の特殊塔という分類にしている。

頭塔の研究は石仏レリーフに関する佐藤小吉（佐藤 1916）以来90年以上続き、早くも1922年には史跡に指定されている。また建築史からも足立康（足立 1933）以来、多くがなされてきた。考古学からは福山敏男（福山 1932）は、頭塔が文献に記された神護慶雲元年の実忠による造塔であることを明らかにした。そして石田茂作は石仏レリーフの前面に歩道があるとの考えを提示した（石田 1958)。

インド文化の影響については、西村貞（西村 1929）が菩提僊那などの関与を推測した。森蘊は実忠インド人説を唱え（森 1971)、斉藤忠はボロブドゥールとの関連を明らかにした（斉藤 1972)。

1987 年からの奈良国立文化財研究所による発掘調査（巽 1989、奈文研 2001）で、構造と年代に関する事実が具体的に明らかになった。調査報告で岩永省三は東南アジア説を否定し、中国磚塔からの影響を述べている（奈文研 2001, 164-173 頁)。

土塔は森浩一による出土人名瓦の研究（森 1957）が契機となり、以後半世紀の研究がなされてきた。仏教考古学の立場から、まず福山敏男（福山 1982）や石田茂作（石田 1969）が研究を行った。また吉田靖雄は行基集団に南海仏教の接触者があったと想定し、斉藤説を補強した（吉田 1987)。発掘調査は 2000 年から堺市埋蔵文化財センターによって開始され（堺市埋文 2006)、頂部以外を瓦で覆った 13 段の構造で、頂部は八角形であることが分かった。

熊山石積遺構は、最初の調査報告が沼田頼輔（沼田 1925）によってなされ、福山敏男（福山 1982）も関心を寄せていた。盗掘資料についての梅原末治の研究（梅原 1950, 53）が年代と性格を考える契機となり、近江昌司は円筒形須恵器に関する詳細な検討を行って復元を試みた（近江 1973)。

３塔を共通して理解しようとしたのは、福山敏男や石田茂作に始まる。斉藤忠（斉藤 1972, 2002）は祖形をボロブドゥールと考えて具体的な比較を行った。

2）ボロブドゥールの研究

1814 年イギリスのラッフルズ(T.S.Raffles)が派遣したコルネリウス(H.C.Cornelius)の調査団により、ボロブドゥールの存在は広く世界に知られることになった。

その後 1873 年バタヴィア協会のレーマンス(C.Leemans)は、最初の学術報告書を刊行した。そして 1885 年イーゼルマン(J.W.IJzerman)は、

現在の基壇の背後にある「隠れた基壇」の存在を発見した。

崩壊の危機状態も明らかになったため、1890年蘭印政庁はボロブドゥール保存対策の調査を開始する。その結果1907年、ファン・エルプ(T.van Erp)は5年間を要した修復を行った。彼は修復事業で確認した状況を、蘭印考古局初代局長クロム(N.J.Krom)と共に1927年から公刊した（Krom & Erp 1927-31）。やがてストットゥルヘイム(W.F.Stutterheim)は、碑文研究からシャイレンドラ(Sailendra)王朝の輪郭を提示し（Stutterheim 1929）、デ・カスパリス(J.G.de Casparis)に引継がれた（Casparis 1950）。

独立後の1953年インドネシア人初代考古局長スクモノ(R.Soekmono)はボロブドゥールに対する関心を継続し、ユネスコは1973年から10年間の修復を実施した。スクモノは巨石文化の中での山岳信仰遺跡との関係を初めて指摘した（Soekmono 1976）。

一方デュマルセ(J.Dumarcay)はスリウィジャヤ(Sriwijaya)王国についての碑文研究者セデス(J.Cedes)の研究を継承しつつ、建築史的研究を70年代項半以降行ってきた(Dumarcay 1977)。またミクシック(J.Miksic)で、聖山としての意味という新たな視点も提示した。

日本人の研究は、井尻進が先駆的に行っている。井尻は在野の研究者で、その著作（井尻1924）は興味深い。持田信夫は写真集を日本人として初めて刊行し（持田 1971）、佐和隆研は仏教研究視点でインドネシアの遺跡の全体像を紹介した（佐和 1973）。ユネスコの修復にも貢献した千原大五郎は、建築史からインドネシアと東南アジア全体を見据えた研究とまとめた（千原 1975, 83）。

レリーフについては、干潟龍祥のジャータカ研究が早くなされている（干潟 1961）。ジャワ仏教特に密教思想との関係では、岩本祐（岩本1973）そして石井和子（石井 1992）の研究がある。筆者は巨石文化石積基壇遺構との関連で考えたことがあり（坂井 1990）、伊東照司はインド・スリランカと東南アジアの仏教図像比較で、レリーフに関する研究を行った（伊東1998）。

ボロブドゥールに関する研究は2世紀に及び、さらに進展しようとしている。

2　頭塔と関連遺構のあり方

ここでは日本の3遺構及び関連する韓半島の石積仏塔の要点を概観する。

（1）　頭塔の形態とレリーフ

頭塔は奈良市東大寺南大門のほぼ真南1.7kmほどの位置にあり、平城宮方向の眺望は極めて良い[2]。発掘調査で上下両層の頭塔があることが判明した（奈文研前掲書）。

1)　下層頭塔

基壇上に築いた2層以上の構造である。

	東西辺m	南北辺m	高さm
基壇	32.75～33.00	31.80～32.00	1.0～1.6
第1段	20.20～20.80	21.70～21.75	3.0
第2段	13.20～13.80	14.30	不明

第1段には仏龕が存在し、また着工は天平宝字4（760）年とされている。

2)　上層頭塔

下層基壇をかさ上げした7段構造である（図1）。

図1　頭塔(奈文研2001)

	東西辺m	南北辺m	高さm
基壇	32.75～33.00	31.80～32.00	1.35～2.30
第1段	24.20～24.85	24.80	1.35～1.50
第2段	22.10～22.45	22.50	0.55～0.80
第3段	18.50～18.70	18.80	0.80～0.95
第4段	15.80～16.00	16.00	0.45～0.75
第5段	12.30	12.40	0.85～1.05
第6段	9.70	9.80	0.85～1.00
第7段	6.35	6.35	0.75
総高			9.10

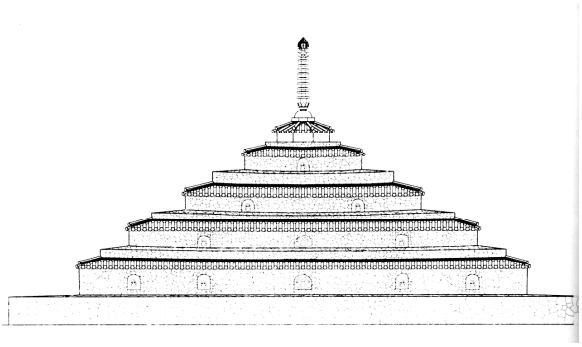


図2　同復元図(奈文研 2001)

基壇端と第1段裾間は、3.5m 以上もある。奇数段に仏龕があり、第7段上面には礎石を据えた心柱抜き取り痕(径 0.46～0.65m 深 2.12m)が発見された。瓦葺屋根が奇数段上と頂部上に設けられ、偶数段は仏龕の前に位置するテラスになる。頂部は八角円堂として復原された（奈文研前掲書;PLAN6-1,2 図2)。記録上の神護慶雲 1（767）年が完成年と考えられている（同前 pp.109)。

レリーフは次表のように比定された[3]（同前 76-82 頁)。

	位置	東面	南面	西面	北面
第1段	a	なし	破壊	善財童子知識歴参図か	善財童子知識歴参図
	b	維摩経変相	未調査地	未調査地	抜き取り
	c	多宝仏浄土	釈迦仏諸尊	阿弥陀仏浄土	弥勒仏諸尊
	d	破壊	未調査地	涅槃変相	下生弥勒仏
	e	破壊	善財童子知識歴参図か	善財童子知識歴参図か	抜き取り
第3段	a	法華経変相	毘盧遮那仏	未調査地	抜き取り
	b	抜き取り	釈迦仏浄土	毘盧遮那仏	弥勒仏浄土
	c	破壊	未調査地	なし	シビ王本生
第5段	a	霊鷲山浄土	過去七仏	未調査地	毘盧遮那仏
	b	二世並坐像	未調査地	なし	三世仏
第7段		抜き取り	未調査地	毘盧遮那仏浄土	毘盧遮那仏浄土

（下線は仏像の背後に建物が描かれているもの。）

ジャータカのシビ王本生は日本最古の例である[4]。

（2）大野寺土塔

北西側に大野寺、南西側に大門池が接し、神亀 4（727）年に行基が建立したとされる。截頭四角錐状で 13 段の階段状である（堺市埋文 2006　数値は復原値　図3)。

	形状と広さ m	高さ m
基壇	方形 53.1×53.1	1.18
第1段	同上 46.6×46.6	0.6
第2段	同上 41.3×41.3	0.6
第3段	同上 36.6×36.6	0.6
第4段	同上 32.5×32.5	0.6
第11段	同上 12.4×12.4	0.6
第12段	同上 10.4×10.4	0.6
第13段	八角形 6.1（径)	---
総高		8.6

基壇端と第1段裾の間は、約 3m とかなり広い。基壇から比べると第 12 段の一辺は 1/5 になっているが、それはこの段までの高さとそれほど変わらない。

発掘調査では頂部の第 13 段には八角形の構造物が載っていたことが判明している。内部は版築の盛土で、各段の平坦部は瓦が葺かれ、垂直部分にも瓦が縦置きされていた。土塔での瓦の役割は、盛土構造全体に対する雨水による崩落の防止を目的としたものだった。

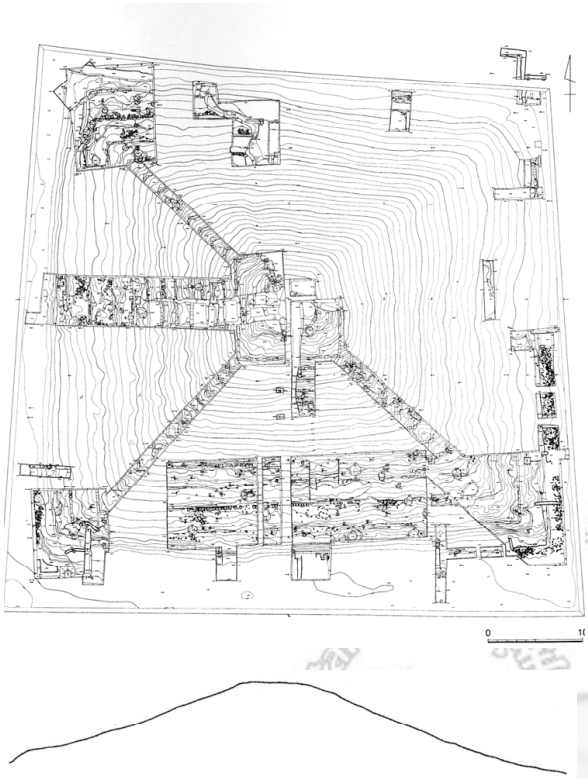


図３　土塔（堺市埋文 2006，近藤 2002）

方形の各面は方位に完全に一致し、自然地形を無視して築かれた。現時点での特徴は次のようにまとめることができる。

1　内部空間を持たない裁頭四角錐の構造物である。
2　版築による盛土を芯とし、瓦を外面保護部材として全体に用いて、基壇と 12 段の階段状ピラミッド形態を築いた。
3　最上段には八角形構造物が載っていた。
4　築造は神亀 4（727）年以降、少なくとも２年以上続いた。

（３）熊山石積遺構と円筒形陶器

岡山県赤磐市の熊山（海抜 508.6m）の山頂近くに位置する。平坦面西端（海抜 486.0m）の岩盤上に、割石で方形基壇を築いている。その上に３段の階段状方形ピラミッドが割石小口積みで築造されているが、主軸は磁北より約 19 度西に偏している（熊山町教委 1975　図 3）。

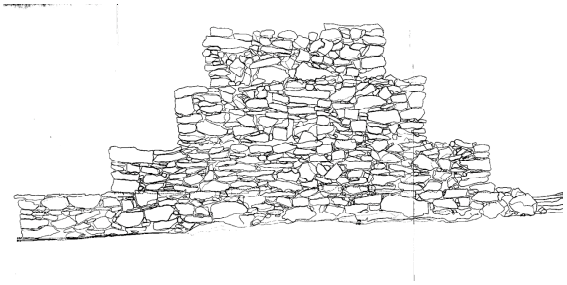


図４　熊山（熊山町教委 1974）

	東辺ｍ	南辺ｍ	西辺ｍ	北辺ｍ	高さｍ
基壇	11.71	11.78	11.77	11.89	0.9/1.5
第１段	7.93	7.66	8.00	7.88	0.95
第２段	5.39	5.40	5.40	5.01	1.25
第３段	3.59	3.60	3.60	3.21	1.04
総高					4.14/4.74

基壇端と第１段裾の間は 2m 近くで、人が周りを巡るには十分な広さである。第２段の中央に方形龕（北辺幅 75 高 88 奥行 91cm）があり、第３段上面の頂部には、蓋石を持つ方形の石室状竪穴（一辺 0.75～0.80cm、深さ 2.0m）があった。基壇幅の 1/3 が第３段の幅になっており、基壇上の高さはそれに近い。第２段が他の段に比べ高い。竪穴から盗掘された円筒形須恵器の観察より、近江昌司は次の検討を行った（近江 1973）。

1　土塔や頭塔と同じような仏塔だが、塔型の墳墓の可能性もある。
2　円筒形須恵器は本来３個の宝輪を組み込んだ相輪の一部だった可能性が推定できる。
3　奈良三彩小壷は舎利容器の可能性があるが、共伴した海獣葡萄鏡は宋代の踏み返し鏡である。
4　古代末以降、宝輪が除かれた円筒形須恵器は竪穴内に埋置された可能性があり、海獣葡萄鏡はそれを裏付けている。

円筒形須恵器は、現在の５個部分のみが本来の姿ではなかったことは確かだろう[5]。蓋部の火炎状突起を水煙とみなしている。円筒形須恵器を相輪とする考えは、土塔や頭塔との類似性を補強しているとも言える。古代末の修験道に

よる竪穴への埋置も、ありうることと考える。
ただ本来塔型の墳墓で三彩小壷（推定高約10cm）を舎利容器とみなすには、竪穴の大きさが深過ぎる。頭塔の心柱抜き取り孔と似た機能であったと考える方が自然と思われる。またこの遺構が塔型墳墓であるとするのは、飛躍があると言わねばならない[6]。
なぜ熊山山頂近くが選ばれたのか。残念ながら現在それに回答する材料は持たないが、何らかの土塔・頭塔に共通する要素があったはずである[7]。

（4）韓国南部の石積遺構

韓国南部には、熊山石積遺構に類似したものが4基確認されている（斉藤 2002, 175-179頁）。

1） 慶尚北道義城郡安平面石塔洞石塔

板石の小口積みで、方形5段の階段状ピラミッド構造を築いている。

	平面m	高m
第1段	11.6×11.1	0.90
第2段	8.4×9.5	0.85
第3段	5.4×6.7	0.75
第4段	3.5×5.1	0.50
第5段	1.7×3.6	0.40
総高		3.40

第2段各辺中央に、龕（高 85-86cm 幅 50-70cm 奥行 87-110cm）がある。崩れた北辺以外は龕が良く残り、内部には光背を持ち蓮華座上に半肉彫りの仏像（高 65-67cm 斉藤によれば東辺は薬師如来、西辺を阿弥陀如来）がある。
龕の底面は地形に沿って水平面を形成したような石積みで、これを基壇とすればその上に5段が積まれていた。

2） 慶尚北道安東郡北後面石塔洞石塔

板石の小口積みで、5段を築いている。

	平面m	高m
第1段	13.0×13.2	1.30
第2段	10.8×10.9	1.20
第3段	7.7×8.2	1.00
第4段	5.5×5.9	0.80
第5段	2.1×2.6	1.00
総高		5.30

第4段と第5段は長方形平面で、全体に龕は見られない。また最上段は長方形ぎみになっている。

3） 慶尚南道山清郡今西面伝仇衡王陵

自然石を7段積み（第1段辺長 20.6m、総高 11.15m）、第4段中央に龕（42×47×65cm）がある。

4） 慶州市普門洞陵旨塔

市街地南東の狼山は7世紀以降の王陵と仏寺が集中している[8]が、この塔は南北嶺間の中腹に位置する。花崗岩切石（1.21×0.3m）を3列積み、2段の土壇側面を覆った構造（下辺長約 5.76m）である。石の間には小礫と粘土が充填され、推定相輪片が出土している。近くには、十二支像板石と蓮弁文板石で囲われた略円形土壇（平面 22.7×21.21m 高 4.55m）がある（斉藤 1938）。後に陶製十二支像及び炭化木石片・瓦磚・仏像片が出土した発掘を行った申營勳は、文武王の火葬場とした（申 1975）。東潮と田中俊明は、陶製十二支像の出土より年代を8世紀前半と考えた（東・田中前掲, 138頁）。
以上の4例は、韓半島の仏塔では例外的な存在である。階段状ピラミッドに似たこの形態は他になく、分布範囲は最も離れた慶州と山清間でも 130km ほどである。義城と安東の両者は、30km 程度でしかない。
斉藤は義城と安東の例について本来5段か3段が想定されると考え、秦弘燮は義城塔の石仏の様式から統一新羅末期頃としている（秦 1971）。だがこの石仏が後世の補填である可能性もあり、陵旨塔との関係は明らかでない[9]。
安東塔を未完成とするなら、義城塔とは類似している。だが陵旨塔とこれら2者は形態的に大きな差があり、義城塔と熊山石積遺構の形態が極めて類似している。石積みの初段に龕を設けている状態は、基本的に同じである。

（5） 小結

斉藤忠は、日本の3塔の共通性を次のようにまとめている（斉藤前掲書, 239-241頁）。

1　仏教寺院と何らかの関係がある。
2　方形プランで壇を持つ多段形式である。
3　基底の広がりに比べ高さが低い。
4　かなり広い幅を持って基壇上に築造されている。

以上に加えて、最頂部の構造を除き内部空間を持たない共通点がある。3は次のように整理できる。

	初段幅 A	頂部幅 B	高さC	B/A	C/A
上層頭塔	24.8	6.35	6.8	0.26	0.27
土塔	46.6	10.4	7.4	0.22	0.16
熊山石積遺構	7.9	3.6	3.2	0.46	0.40
義城安平塔	11.6	3.6	3.4	0.31	0.29
安東北後塔	13.2	2.6	5.3	0.20	0.40
石村洞4号墳	24.0	13.2	2.3	0.55	0.10
将軍塚	29.3	-----	11.3	------	0.39
九政洞方形墳	9.5	-----	3	------	0.32

初段と頂部辺の幅は、熊山石積遺構が1/2近くだが、3段しかないためだろう。高さと初段幅の関係は、熊山で高さの割合が大きい。韓半島2塔も熊山と同程度以下である。積石塚古墳とでは、上下の幅の比は古墳が大きく、高さとの比も石村洞4号墳を除いて同様である。つまり側面形態は古墳と同程度かそれよりも高さの割合が小さく、垂直方向への指向性が小さいことは確かである。

開放的な内部空間の不在そして水平指向を見るなら、これらの塔は積石塚古墳に近いが、それは安定的な造形を築こうとした時の自然な類似であろう。

3　インドからの伝播

ここでは、仏塔の誕生から頭塔やボロブドゥールの時代までの、伝播と変化を概観したい。

（1）南アジアの仏塔

仏塔とは本来ブッダの骨を収めた一種の墓で、インドに残る最古の例は、マディヤ・プラデーシュ州のサーンチー(Sanchi)の仏塔群である。

佐藤正彦・杉本卓洲によれば（佐藤 1996, 125-166頁、杉本2007, 43-44頁）、前3世紀にアショーカ王が建立し、前2世紀に修復された第1塔（図5）は、レンガで巨大な覆鉢物（覆鉢）を築き、その頂部を水平に切って方形の柵（平頭）を巡らし、上部に三重の傘蓋を立てている（直径36.6m、総高16.5m）。覆鉢の下位には礼拝用のはテラスがあり、またテラスと地上には欄楯が巡っている。

同様形状の塔は、マハーラーシュトラ州のアジャンター(Ajanta)石窟第10窟に見られる（佐藤1996b、杉本2007,160-163頁）。サータヴァーハナ(Satavahana)朝が築いた後2世紀始めの第10窟は最古の礼拝対象のチャイティヤ窟である[10]。5世紀のチャイティヤ窟である第19窟や第26窟には蜜柑型覆鉢の前面に石仏が安置され、礼拝の対象は塔から仏像に移って行った状況が判明する[11]。

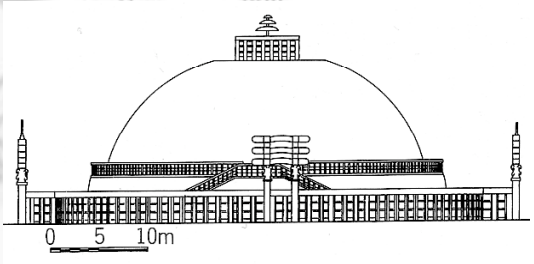


図5　サーンチー（佐藤1996a）

ブッダの活動地域であるウッタル・プラデーシュ州のサールナート(Sarnath)（鹿野苑）やビハール州ボードガヤー(Bodh Gaya)には、異なった形状の塔が残っている。前者のダーメク(Dhamekh)塔（径36m残存高43m）は円筒形が上下2段に接合された形をしている。下段は全体に仏龕が設置され、上下両段共に頂部は半球形状で、グプタ(Gupta)朝後期6世紀頃の創建と考えられている。

ボードガヤーのマハーボディ(Mahabodhi)寺大塔（高52m）は、方形祀堂上に巨大な四角錐型の塔が立ち、その四方に同形小塔が並ぶ形状である。金剛宝座型と呼ばれるこの姿は、時期的にどこまで遡れるかは明瞭ではない[12]。

東インドのオリッサ州ラットナギリRatnagiriには、8-9世紀の小塔がある。台形の高い基壇上に覆鉢を載せるが、覆鉢下位の円筒

状部分に四方仏の龕がある。龕下方には階段が刻まれている（杉本前掲書 245-246 頁）。

パキスタンからアフガニスタンにかけて、後2世紀から5世紀頃の仏塔が残っている。アフガニスタンのグルダラ(Guldara)の塔は、方形の祀堂状基壇の上に円筒形構造が載り、その頂部は半球形である。円筒形部分には列状に龕が並んでいる。この地域で最大の塔と推定されるパキスタン、ガンダーラ地方（ベシャワール Peshawar）のクシャーナ朝カニシカ王大塔は、現在シャー・ジ・キ・デリー(Shah-ji-ki-Dheri)遺跡に基壇跡しか残っていない。この基壇跡は各辺に突出部を持つ方形で一辺55mを測るが、玄奘の『大唐西域記』には 5 段の基壇があり 25 層の金銅層輪があったと記される（斉藤前掲書, 66-69 頁、杉本前掲書 127-131 頁）。グルダラ塔と似た形状が考えられるが、すでに玄奘の時代に3回の修復を経ていた。前1世紀から後 2 世紀頃と考えられているタキシラ(Taxila)のダルマラージカー(Dharmarajika)寺院の仏塔跡（直径 46m）は、サーンチーに似た単純な覆鉢形状を示している。

南インドでは、アーンドラ・プラデーシュ州にあるサータヴァーハナ朝のアマラーヴァティ(Amaravati)寺院跡の塔が知られている。後1～3 世紀の仏塔は現在円形の基部（径 51m）を残すのみである。しかしこの遺跡のレリーフ（写真 1）には詳細な仏塔の状況が見られテラス四方に5本の立柱を持つ小突出部があるが、基本的にアジャンター第 10 窟の塔に近い。やや後出するナーガルジュナコンダ(Nagarjunaconda)大塔跡（直径 28m）も同形である。

北西方向への仏塔の流れは方形基壇が発達するのに対し、南方向への流れは覆鉢形状がかなり強く保持される。それは、スリランカで顕著に見ることができる。

スリランカでは、初期の都アヌラダプーラ(Anuradhapura)に巨大な仏塔がいくつも残っている。

前 3 世紀創建とするトゥーパーラマ(Thuparama)塔（径 17.7m 高 19m　写真 2)、ルヴァンヴァリサーヤ(Ruvanvalisaya)塔（基壇辺長 142m 現高 55m)、1 世紀創建とされるアバヤギリ(Abhayagiri) 大塔（径 106m 現高 74m　写真 3)、ジェーターヴァナ(Jetavana)塔（現高 70m)、ダクヌ(Dakunu)塔（基壇辺長 113m）などである。

最古のトゥーパーラマは 7 世紀に修復され、両側面がほぼ垂直で隅丸方形に近い。ルヴァンヴァリリサーヤの前面には、アマラーヴァティ様式の仏像が置かれている。

スリランカの塔の形態的特徴としては、頂部の傘蓋部が細長い円錐形に、また平頭が低い直方体に変化し、それぞれが覆鉢に対し巨大化している。

以上をまとめると、南アジア仏塔の形態は基壇の高いラットナギリも含めて半球形覆鉢構造を主体とし、水平方向を強調した階段状ピラミッドは存在していない。

（2） 東南アジアへの仏教伝播と仏塔

東南アジアでボロブドゥールより古い 8 世紀以前の仏塔の痕跡は、ほとんどミャンマーとマレー半島及びタイに限られる。

ミャンマーでは、エーヤワーディ川流域にピュー(Pyu)族の都市国家が最初に形成された。それらの中で仏塔の痕跡があるものは、アウン・タウ(Aung Thaw)によれば次のとおりである（Aung 1972)。

1～5 世紀の存続が推定されるベイタノー(Beikthano)では、発掘調査で2段の方形基壇上に築かれた円形プラン構造物が発見されている。これはアマラーヴァティ様式の仏塔と考えられている。

ピュー最大の都市であるシュリクシェトラ(Srikshetra)（チャイキッタヤーThayekhittaya)には、パヤージー(Payagyi)塔、パヤーマー(Payama)塔、そしてボーボージ(Bawbawgyi)塔（高 46.6m　写真 4）が残っている。パヤージーとパヤーマーは3段の低い円形基壇の上に築かれた直径より高さが大きく砲弾型である。一方ボーボージは同様の低い5段の基壇の上に高い円筒状部分（直径約 20m 高約 30m）が載り、頂部は低い円錐形をなす。これらはサールナートのダーメク塔からの影響と考えられる。

シュリクシェトラでは 5 世紀と考えられる南

インドのパッラヴァ(Pallava)文字碑文が出土しており、9 世紀まで存続していた。キンバ(Khinba)マウンドから出土した銀製のミニチュア塔（図 5）は、上半が七重の傘蓋を持つエローラ第 10 窟に近い類球形をなし、下半は似た類球形の基壇を持っている（Aung 1972, 16 頁)。初期には、このようなエローラ様式に似たものが伝わったことは間違いない。またほとんどアマラーヴァティ様式塔そのものを刻んだ、石製奉献板（写真 5）が出土している[13]。このように形成されたピュー様式の塔は、やがて円筒形下部の上に半球形の上部が接合するようになる。

エーヤワーディ川中流のバガン(Bagan)は 11 世紀中葉にビルマ人が初めて建設したバガン朝王都で、数多くのビルマ様式仏塔（パゴダ pagoda）で知られる。ここにはピュー様式仏塔も少し残るが、バガン朝初期 1059 年築造のローカナンダ(Lawkananda)塔（写真 6 ）は、ボーボージと大きく異なって多角形の 5 段程度の高い基壇の上に建てられている。

そのようなピュー様式仏塔から基壇がさらに発展して高くなり、また頂部の円錐形部分が大きくなったのが、初期ビルマ様式のシュエジーゴン(Shwezigon)塔（11 世紀後半)、シュエサンドー(Shwesandaw)塔（1057 年　写真 7）である[14]。特にシュエサンドーは形態的にボロブドゥールとの類似が指摘するが、ピュー様式仏塔から基壇が階段状変化で生じたものである。この変化に何らかのボロブドゥールからの影響があった可能性は年代的に考えられるが、その逆の影響は年代的に想定できない。

タイ中部のナコン・パトム(Nakhon Pathom)には、ドヴァーラヴァティー(Dvaravati)時代（7～11 世紀）の影響を残す仏塔プラパトム・チェディ(Phra Pathom Cedi)（写真 8）がある。現在の姿は 19 世紀後半に増築され、正面に仏陀立像が納められた部屋が設けられたものである。しかい形態的には、明らかなアヌラダプーラ時代のスリランカ様式の特徴を多く残しているを示している。

またドヴァーラヴァティーのいくつかの環濠遺跡にはクブア(Khu Bua)のワット・クロン(Wat Khlong)寺院跡のように、7 世紀代のレンガ造仏塔跡が見られる。ただ本体の平面形が方形基壇の上に円形をなすことは分かるものの、上部形態は不明である（Wales1969, Dupon2007)。

マレー半島では、現在仏塔そのものは全く残っていない。しかし考古資料は、早い段階で仏塔に関する知識ももたらされていたことを示している。

まずクダー州南部で発見された、ブッダグプタ(Buddhagupta)碑文（図 6）がある。この碑文の中央には蓮華座上に球が描かれ、その上には直方体、そして高い七重の傘蓋が載っている。蓮華座下は細い蓮の茎が描かれ、観念的に蓮と仏塔を合体させた図像である[15]。

その近傍では、同じように仏塔の画像を刻んだスンガイ・マス(Sungai Mas)碑文（41×25×5cm　写真 9 ）も発見されている。これは 5 段以上の高い方形基壇の上に蓮華座があり、そこに半球形が載り、さらに板状と逆台形部分が描かれている。逆台形の上には傘蓋があった可能性が高い[16]。実際の塔であっても不自然ではない図像で、5-7 世紀と考えられている（Miksic 1998、岩本 1996, 8-9 頁)。

両碑文が発見されたクダー州南部のブジャン(Bujang)渓谷地域は、仏教寺院が確認されている。SB1 遺跡のように八角形の建物跡（径 19.5m）もあり、仏塔跡とする見解もある（Jacq-Hergoualc'h 1992, 49-50 頁)。

ブジャンから 150km の南タイのヤラン(Yarang)では、8-9 世紀のレンガ積の寺院跡群が発見され、そこから大量の陶製ミニチュア塔が出土した。それは基本的にはスンガイ・マス碑文塔と同形である（横倉 1995)。これらが出土した遺構は正方形（一辺約 13m）の四面に階段が付く構造で、塔と見る考えがある。

8 世紀段階に、球形構造と高い基壇がセットになった仏塔がマレー半島地域に存在していた。この地域の北側のナコン・シタマラー(Nakhon Si Thammarat)では 775 年銘のスリウィジャヤのリゴール(Ligor)碑文が発見されており、ボロブドゥールを考える上でも重要な意味がある。

東南アジアでは[17]南インド様式のアマラーヴァティ様式、またサールナートのダーメク塔の

影響で仏塔が建てられた。また一部にスリランカ様式も伝わった。いずれも内部空間を持たず垂直方向への指向のみが顕著だった。しかし階段状ピラミッド形態はボロブドゥール以前には存在しない。

（３） 中国の仏塔

8 世紀までに築かれた現存するものは、密檐式・楼閣式及び亭閣式に限られる。

密檐式の代表例は河南登封嵩嶽寺塔（520/524 年、高 40m　写真 10）や陝西西安薦福寺小雁塔（707 年、現高 43.3m）があり、共に 15 層だが前者は平面十二角形、後者は四角形である。また楼閣式では、西安の慈恩寺大雁塔(652年､第１層辺25m高63m　写真11）と興教寺玄奘墓塔（669 年、高 20m）が著名で、共に四角形で前者は７層、後者は５層をなしている。亭閣式は山東歴城神通寺四門塔(611年、高 13m）が代表である。

圧倒的に多い密檐式と楼閣式は共に多層塔で、いずれも基部が垂直方向に長大化している。前者は基壇の軒が重なって延びた構造であり、後者は基壇が階層をなした状態である。基部が単層の亭閣式も垂直指向である。

これらはインドで仏塔の主要な部分であった覆鉢と平頭や傘蓋が形骸化し、反対に基壇が異常に拡大発展した構造と言える。どの型式でも基壇は内部に空間を持ち、時には仏像が安置される。覆鉢より上は単なる屋根飾りに過ぎなくなっている。

このような中国仏塔の形成過程については、さまざまな検討考察が考えられてきたが、ガンダーラでの基壇が祀堂化した形状を出発とすることはほぼ共通している。

絵画資料などでは、斉藤忠の紹介（斉藤 前掲書 128-145 頁）に従えば 8 世紀までの仏塔には次のものがある。

1) 敦煌第 428 窟金剛宝座式塔（北周）

中央に大塔があり、その四方に小塔が配せられている。しかし大塔・小塔の全ては楼閣式の三層塔である。

2) 竜門石窟奉先寺天王像円形三層塔（8 世紀初頭）

頂部には蓮華座の上に円錐形構造物があり、その下に円形の三層がある[18]。斉藤が述べるようなサーンチー塔の模倣というより、基本的に日本の百万塔の形状に近い。塔身も各層と共に円錐状に広がっており層間も接近しているので、密檐式を表現しているのかも知れない。

3) 雲岡石窟石仏寺窟三層塔

大きな基壇の上に載った三層の楼閣式塔で、頂部には比較的大きな覆鉢が見られる。三層の屋根の下には組物構造があり、木塔がモデルだった可能性がある。

4) 雲岡石窟第２窟七層塔

楼閣式で、各層の屋根先からは垂飾そして層輪からは２枚の幡が垂れ下がっている。

5) トルファン、ベゼクリク(Bezeklik)石窟壁画

蓮華座の上に蜜柑型の覆鉢が載り、その上に隅飾りを付けた二重の平頭がある。さらに頂部は円錐形をなし、剥落した先端から４枚の幡が下がっている。

6) クチャ、クムトゥラ(Kumtura)石窟壁画

上半は覆鉢の上に皿形部分があり、その上に２枚の幡を垂らした円錐形頂部が載る。下半は仏像が入った祀堂状基壇で、覆鉢との間は皿形や獣脚状である。実際の建造物そのままとはではないが、ガンダーラ様式の仏塔との関係が考えられる。

ベゼクリクやクムトゥラに似た大きな覆鉢がある仏塔は、アフガニスタンのバーミヤン壁画にあり（同前 257 頁挿図 83)、また敦煌壁画にも見られる[19]。以上のような状態から、ガンダーラから西域ルートで仏塔が伝わる中で、基壇部分が楼閣状になっていく過程が理解できる[20]。

8 世紀までの中国仏塔は、型式に関わらず基壇が垂直方向に発達し内部空間の存在に大きな特徴がある。

4　ボロブドゥールの位置

インドネシアのジャワ島中部クドゥ(Kedu)盆地にあるボロブドゥールは、これまで見て来た仏塔の発展史の中ではかなり特異な位置を占めている。築造は 8 世紀後半に始まるが、それ以前に似た形状の仏塔はどこにも見られない[21]。

そこでインドネシアの仏教建築の流れの中で、ボロブドゥールの位置を確認してみたい。

（1）ジャワの仏教寺院前史

インドネシアでのインド系文化の伝来については、4 世紀にカリマンタン島東部のクタイ(Kutai)と 5 世紀には西部ジャワで碑文群が発見されている。いずれもサンスクリット語をパッラヴァ文字で記したもので、ヒンドゥ教に基づく王権の確立を現した。

仏教関係ではスラウェシ島西部のシケンデン(Sikendeng)で発見されたアマラーヴァティ様式の青銅製仏像が最古である。だが発見地では、他の遺構の存在は明らかでない。確実な仏教遺跡は、7 世紀後半にスマトラ南部のパレンバン(Palembang)地方で集中して発見されている。683 年から 686 年の間の紀年銘を持つ、スリウィジャヤ王国の名が記された 4 碑文が注目される。古マレー語をパッラヴァ文字で記しているが、タラン・トゥオ(Talang Tuo)碑文には、密教系大乗仏教の用語が記されている（岩本 1973, 261 頁)。唐の義浄は 672 年から 695 年まで東南アジア経由でインドを往復したが、そのうち約 10 年はスリウィジャヤに滞在して訳経活動を行った。そしてそこには千人以上の仏僧がいたことを記している。

パレンバンではスグンタン丘(Bukit Suguntang)からは推定 8 世紀の石仏も出土しているが、明確な仏教寺院建築は残っていない。しかしサランワティ(Sarangwati)遺跡では、多数の土製ミニチュア塔とその銅製型が出土している（Ambary 1984, 16頁)。高さ 10cm に満たないこのミニチュアは主塔の裾に 8 基の小塔を配した形状で、頂部が円柱状になった釣り鐘型をし中部ジャワ出土例（写真 12）と同形である。7 世紀修復のアヌラダプーラのトゥーパーラマ塔に最も近い形状である。

スリウィジャヤの勢力は 8 世紀になると、マレー半島北部まで勢力を拡げたばかりか、ジャワ島中部に存在していたシャイレンドラ（サンスクリット語で「山の王」の意味）王朝と婚姻などで結合するようになる。そして多くの仏教建築を、中部ジャワで築いた。

中部ジャワのインド系建築物は、ヒンドゥ教シヴァ派の寺院として建てられたディエン(Dien)高原寺院群やウンガラン山中腹のグドン・ソンゴ(Gedong Songo)が最も古く、7 世紀後半と考えられている。いずれもパッラヴァ様式の建築だが、共に高山の山頂近くに立地している点に特徴がある。しかし 8 世紀中葉[22]スリウィジャヤと結合したシャイレンドラは仏教化し、以後 1 世紀の間、次々と石造仏教寺院をクドゥ盆地とプランバナン(Prambanan)平野に建立していった。

仏教寺院で創建年が判明している最古例は方形祀堂上にスリランカ様式塔を載せた 778 年のカラサン(Kalasan)寺院で、またスウ(Sewu)寺院も 782 年の創建が考えられている(千原 1973, 205 頁)。

（2） 構造

ボロブドゥールの構造について、千原大五郎の研究（千原 1973, 83）から要点を記したい。

ボロブドゥールは自然の丘の上に人工盛土を築き、それを安山岩切石で覆った構造である（図６）。内部空間を持たず、中部ジャワのほとんどの寺院とは全く異なっている。方位に沿った形で各辺に張り出し部を持つ二重の正方形を基壇とし、その上に次第に小さくなる同形の５段の方形段を載せる。この方形段各段の間は回廊で、本体壁と欄楯はレリーフパネルで覆われている。また欄楯には外向けに 432 の龕を設け、仏像が安置されている。

第５方形段の上面には３段の低い円形段が載るが、形状は隅丸方形から真円形に徐々に変化している。円形段各上には釣り鐘型の小塔 72 基が並び、内部には仏像が納められている。小塔には小窓が設けられ、上段ほど窓空間は小さくなる。中央に大塔が据えられるが、これには窓はなく内部には何も入っていなかった。

	大きさｍ	高さｍ
第１基壇	118×118	1.50
第２基壇	113×113	2.14
基壇高計		3.64
第１方形段	92×92	2.18
第２方形段	83×83	3.86
第３方形段	75×75	2.82

第４方形段	67×67	2.47
第５方形段	59×59	2.38
方形段高計		13.71
第１円形段	径54	1.84
第２円形段	径41	1.84
第３円形段	径28	1.84
円形段高計		5.52
中央塔	径13	18.39
総高		41.26

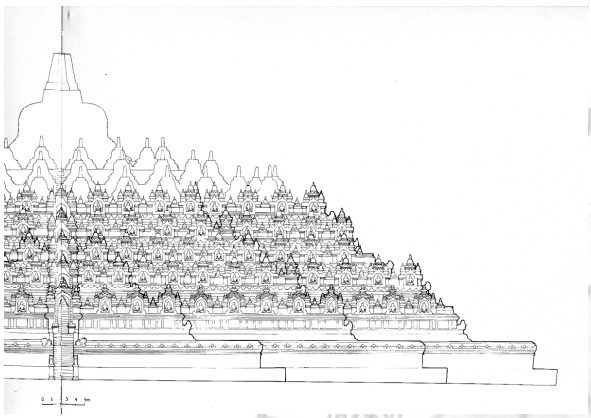


図６　ボロブドゥール(Miksic 1990)

平面規模は第１基壇と第５方形段の間が 64%で、また方形段の高さの辺長に対する割合は15%である。さらに第５方形段までの高さは総高の４割程度である。つまり側面の姿は、上面が広い台形の上に中央塔も含めた小塔が多く載る形である。自然丘陵が周囲より 10m 程度の比高があるため遠方からも識別できるが、構造体としては垂直方向より水平方向が大きく強調されている。

当初の設計[23]が少し異なっていたことは確かだが、方形段部分は変わっていない。そのため、時期的に近いアヌラダプーラの大塔群のような大きな半球形やシュリクシェトラの円錐形が、当初の形態だったとは考えられない。

（３） レリーフと仏像

方形段の４回廊はレリーフで埋め尽くされ、方形段欄楯と円形段に計 509 体の仏像が安置されている。

レリーフは合計 1,460 面の方形パネルとして彫られており、その内容は次表のような経典に依拠している。

位置	部分	パネル	典拠
隠れた基壇	外面	160	分別善悪応報経
第１回廊	主壁上段	120	方広大荘厳経
	主壁下段	120	本生譚・譬喩経
	欄楯上段	372	
	欄楯下段	128	
第２回廊	欄楯	100	
	主壁	128	大方広仏華厳経入法界品
第３回廊	主壁	88	
	欄楯	88	
第４回廊	欄楯	84	
	主壁	72	普賢菩薩行願讃
総計		1460	

ジャータカ説話は種類が多く、また華厳経入法界品とは、善財童子知識歴参図である。問題は、芸術的にも極めて優れたこのレリーフ[24]の下絵が、どのような文化的背景で描かれたのかという点である。

神仏や主要登場人物の表現がインド的であることは間違いない。それぞれの経典は主役の装飾表現法と共に伝来したと思われるが、付加的な要素が重要である。ジャータカに多く描かれている船は船外浮材（アウトリガー）を両側面に付けたもので、一般にはオートロネシア語族特有のものとされている。また華厳経部分を中心に建物もかなり見られるが、多くは中部ジャワ各地に残るこの当時の寺院建築と酷似している。

最も重要なレリーフは、寺院と共に崇拝の対象として描かれた塔（写真 13）である。その多くはアマラーヴァティのレリーフに通じる球形か蜜柑型で、ボロブドゥール自体にある釣り鐘型は僅かである。

ボロブドゥールの塔はそれらとは別なものを作ったことを示している。傘蓋部にスリランカ様式塔からの変化がある釣り鐘塔は、少なくともジャータカ・レリーフの塔とは異なって意識していた可能性が考えられる[25]。

仏像は、次のように解釈されている。

位置	東面		西面		南面		北面		計
第１方形段	阿閦仏	26	阿弥陀仏	26	宝生仏	26	不空成就仏	26	104
第２方形段	阿閦仏	26	阿弥陀仏	26	宝生仏	26	不空成就仏	26	104
第３方形段	阿閦仏	22	阿弥陀仏	22	宝生仏	22	不空成就仏	22	88
第４方形段	阿閦仏	18	阿弥陀仏	18	宝生仏	18	不空成就仏	18	72
第５方形段	毘盧遮那仏	16	毘盧遮那仏	16	毘盧遮那仏	16	毘盧遮那仏	16	64
第１円形段	釈迦牟尼仏				32				72
第２円形段	釈迦牟尼仏				24				
第３円形段	釈迦牟尼仏				16				

これらの仏像はいずれもグプタ朝のサルナート様式とされる坐像だが、それぞれ仏相認定の根拠は印相である[26]。基本的に密教の金剛界マンダラにほぼ則っていることは間違いない（千潟 1994、岩本 1973 など）。ラットナギリ小塔四方仏の影響も感じられる。

それは正方形と円形を上下に使い分けた設計思想とかなり正確に対応している。しかし６種の仏像を区別しているが、第１～第４方形段と第５方形段では考え方が異なっている。毘盧遮那仏を方位と無関係とするなら、なぜ円形段に置かなかったのか。

あえてそうしたのは、方形段数を５、円形段数を３とすることが前提であったためではないか。中央塔も含めて奇数段構成が、基本的な要件であったと考えられる。

（４）小結-建立年代について

ボロブドゥールには、築造時期を直接示す碑文はない。しかし隠れた基壇にはレリーフの配置を示す古代ジャワ文字が刻まれている。字体の特徴は、他の碑文資料との比較から 760 年～847 年の間とされる。

その前提のもとに千原大五郎は、築造開始を 790 年頃、一応の竣工を 840 年頃、最終的な完成を 860 年頃とした。それは 780 年前後にカラサンとスウが創建されたこと、842 年にはシャイレンドラの王女がボロブドゥールと推定される寺院に水田を寄進したとの碑文資料が存在するためである。また着工から完成までの間に、大小５回の変更があった。

千原はヒンドゥ教寺院も含めて中部ジャワ期全ての寺院建築を、基壇の形態的特徴から８種類に大別している。そして碑文で確定している創建年代、ディエンとパッラヴァのマーマッラプラム(Mamallapuram)寺院群との比較などから、中部ジャワ期を次の４期に区分した（千原 1983, 121-132 頁）。

第１期　ディエン前期（680 年頃～730 年頃）

第２期　ディエン後期＝初期シャイレンドラ期（730 年頃～780 年頃）

第３期　シャイレンドラ盛期（780 年頃～850 年頃）

第４期　中部ジャワ末期（850 年頃～920 年頃）

第２期は、高山に立地したディエン後期様式と平地に立地した初期シャイレンドラ様式が並立したとしている。だが千原が提示した基壇の分類と、この４期区分は対応していない。つまり基壇の建築様式の差は、基本的に同時存在の技術系統の差ということになる。そのため４期区分の根拠は、ディエン前期とマーマッラプラムとの類似性が述べられているものの、他はあくまで碑文資料が残る遺構の増築過程が中心になっている。

カラサン・スウとボロブドゥールの形態は全く異なり、10 年ほど遅らせた根拠は明確ではない。また初期シャイレンドラ様式とするものは、732 年のヒンドゥ寺院グヌン・ウキール(Gunung Wukir)と最初の仏教寺院であるカラサンの間の半世紀に、東部ジャワのヒンドゥ寺院バドゥ

(Badut)しか例がない。この第２期の終末頃に突然、仏教寺院が出現したことになる。

ミクシックは、760 年頃から 830 年頃までを建立期間としている（Miksic 1990, 25 頁）。これは恐らく、中部ジャワのヒンドゥ教勢力が東部ジャワに移った可能性を示す 760 年の碑文と、842 年の水田寄進という２碑文を根拠にしている。仏教寺院としてのプロトタイプは不明で、カラサン・スウより遅くなる必然性はない。そのため中部ジャワで仏教化が確立した直後 760 年頃を、ボロブドゥール着工とする可能性があるだろう[27]。

いずれにしてもボロブドゥールのような巨大建築の建立に、少なくとも半世紀以上の長い時間が必要だったことは確かである。また着工前に設計構想はできていたはずである。そして重要なことは、中部ジャワのインド系寺院群の中にボロブドゥールの先行形や衰退系の遺構が見られない点である。つまりボロブドゥールは、長い建立期間も含めて特別の存在であったことは間違いない。初期シャイレンドラ期の資料の少なさから見ても、ミクシックの年代観により妥当性が感じられる。

5　インドネシアの石積基壇遺構

特異な形態のボロブドゥールは、なぜ突然生まれたのか。それを考えるには、インドネシア在来の石積基壇遺構を無視するわけにはいかない。先史文化山岳信仰に由来する石積基壇遺構は、年代的にはインド系文化と重複併行して、西暦紀元前後から 15 世紀頃まで長い時間幅があったこととされている。それらの概要を見てみよう。

（１）原初的様相

インド文化の要素を持たない遺構で、ピラミッド型・斜面テラス型に分かれ、両者の統合型も存在する。

1）ピラミッド型–南スマトラの遺跡群

礫を積んで階段状ピラミッドを形成したもので、基本的に平地に立地する。小さいものが多く、残存例は僅かしか報告されていない。南スマトラ内陸のラハット(Lahat)に残る典型的な 2 例を、ヒョープ(van del Hoop)が示している（Hoop. 1932, ils. 49, 63）。

ミンキッ(Mingkik)遺跡（図 7）は川原石を積んで２段を築いたもので、頂部は石列で不等間隔に区分されている。その狭い部分には小さなメンヒルが２基残っている。平面形はやや長方形で方位に沿わず、メンヒルのある側は北東になる。

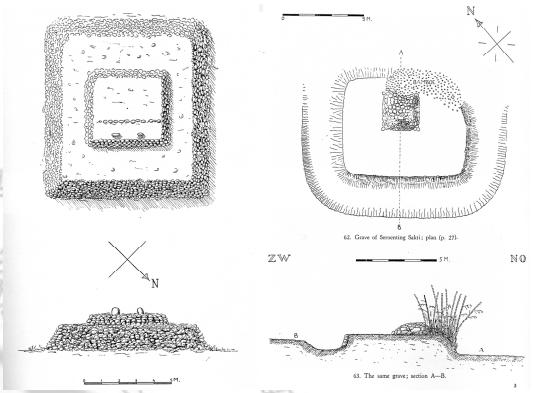


図 7（左）　ミンキッ遺跡　図 8（右）　サルンティン・サクティ(共に Hoop 1932 による)

	平面ｍ	高ｍ
第１段	8.5×7.5	1.5
第２段	4.0×3.5	0.7

サルンティン・サクティ(Sarunting Sakti)遺跡（図 8）は２層築造である。第１段は少なくとも三方に堀（幅 2.5m）を巡らせて長方形プランを作り、内壁に河原石を積んでいる。その上の北東側に偏した部分にほぼ正方形の第２段が築かれている。これは全て石を積んでいる。地山は傾斜しているが、第１段の上面は水平に保たれている。周囲の堀から考えても盛土をしているだろう。

	平面ｍ	高ｍ
第１段	7.5×6.0	1.0
第２段	2.3×2.5	0.7

この両遺跡は 10km 程度しか離れず、地形的に北東は下流にあたる。この地方はパガールアラム(Pagaralam)盆地と呼ばれ、石像や箱式石棺などの遺跡が密集している。これらの石積基壇

遺構とどのような関係にあるかは不明だが、石像には特徴的な戦士像[28]が多い。

両遺跡は共にそれほど高さを持たないため、同規模の遺構はさらに多く存在する可能性がある。

2) 斜面テラス型−グヌン・パダン遺跡

山服の傾斜地や尾根を造成してテラスを築いたもので、最上位テラスに礼拝対象であるメンヒルなどが設置される。また聖山の頂上への方向をとる。ジャワ島西部の山中で多く発見されているが、他地域でも存在している[29]。

その代表例であるグヌン・パダン(Gunung Padang)遺跡については、研究史と踏査成果を報告したことがあるが（坂井 1990)、概要は次の通りである。

遺跡(図9)は、海抜855mの高原に位置する。周囲の川から 200m ほどの比高を持つ独立した尾根上を造成して、５段のテラスを築いている（全長118×40m)。

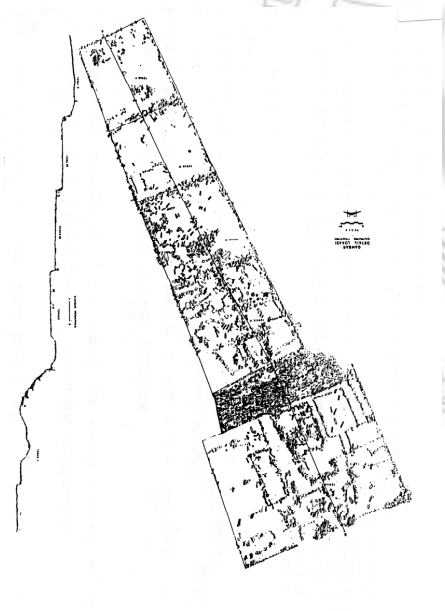


図9　グヌン・パダン遺跡　(Bintarti 1981 による)

	広さm	高m
第１段	40×36×28×28	
第２段	22.3×25×24×18.5	5.0
第３段	18.5×18×18×18	0.75
第４段	22×20	0.6
第５段	17.5×19×16×19	1.0

長方形に近く広い第１段と、正方形に近い第２段以上に別れる。両者の間には 5m の段差があるため、第１段からは直接第２段以上を見通すことはできない。

テラスは玄武岩の柱状節理角柱を使って周囲が囲まれ、内部に入り口を持つ方形区画が築かれる。また各テラスの平坦面造成や階段形成も同じ石を積んでいる。第５段にはメンヒルがあり、また谷を挟んで「先祖山」と呼ばれる山並みを遠望できる景観がある。

築造にはかなりの労働力が必要で、石材は全て谷底から運んでいる。日本の中世山城にも似た景観を示しているが、周囲にはまとまった人口が居住できる平地はない。そのため一定度の距離からの労働力移動が必要であり、かなり組織化された社会が背景にあったと想定できる。

年代を推定できる資料は発見されていない。しかし背景の社会が、ヒンドゥ教や仏教の原理とは無関係だったことは明らかである。

3) 統合型−レバッ・チベドゥ遺跡

斜面テラス型の再奥テラスに、ピラミッド型が築かれたものである。ジャワ島西部の山中のみで確認され、代表例がレバッ(Lebak)地方のバドゥイ(Baduy)山中にあるレバッ・チベドゥ(Lebak Cibedug)遺跡である。

交通不便な場所に位置するため探訪が難しく、1920 年代に発見されて以来踏査成果はヒョープ（Hoop ibid.）とハルワニ Halwany Michlob（Halwany 1993）しか発表されていなかった。しかしそれぞれのスケッチ図は大きくイメージが異なっており、実態については江上幹幸の調査(江上 2001)でようやく明らかになった。

この遺跡は、インド洋海岸から 30km 内陸で海抜870mの高原地帯に位置する。川から比高10mの平面ヒョウタン型をなす台地上(約100×50m)に展開している（図10)。

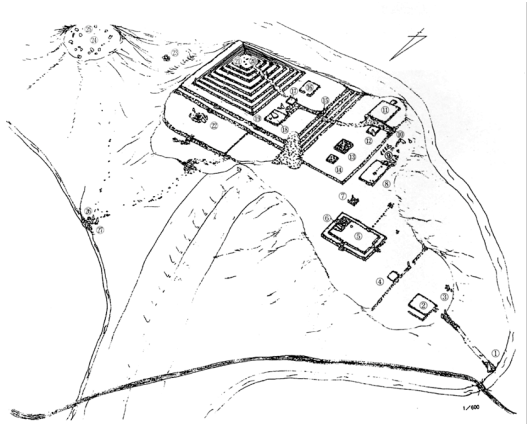


図10　レバッ・チベドゥ(江上2001)

遺構は大きく分けて、下位の二つの広場部分と上位の方形基壇部分よりなる。主体をなす後者（44×45m）は、下から石積みの方形前庭、４段のテラスそして最上位の９段ピラミッドで構成されている。

このピラミッド[30]は階段状に側面に石積みした構造（最下段19×18.5m、最上段5.5×4.5m、高さ約6m）で、各段の四隅には切石のメンヒル（高さ0.5〜0.9m）が設置されている。また最頂部には柱状メンヒル（0.6×0.2m）が見られる。石積みは他の遺構と同様に垂直部分にのみなされ、平面部分には基本的に存在しない。

このピラミッドが完全な盛り土なのか、それとも自然の高まりを加工したものかは不明である。しかし台地上全体をさまざまに造成したことは確かで、方位と方形を意識した設計がなされていることは間違いない。

グヌン・パダン遺跡と同様に、この遺跡の築造も成熟した社会組織の存在が前庭であり、その居住域は一定度の距離を隔てている可能性が高い。さらにヒンドゥ・仏教的様相は、ここでも皆無である[31]。

（２）ヒンドゥ・仏教伝来後の様相

インド文化の影響が明らかに認められる石積基壇遺構で、紀元後４世紀より確実に新しい。

1）プグン・ラハルジョ遺跡

プグン・ラハルジョ(Pugung Rahar jo)遺跡は、スマトラ南端のランプン州東部のスカンプン(Sukampung)川中流に位置する大規模な複合遺跡である（Sukendar 1979)。スカンプン川に注ぐプグン川の右岸に展開するこの遺跡には、連結する３個の環濠と石積基壇遺構群がある。石積基壇遺構は大小計13基見られるが、中央の環濠の内部から東外側にかけて分布している。

最大の６号基壇遺構(第１段辺長約14×12m、総高6m　写真14）は東端の環濠外にあり、３層構造のピラミッド状をなし堀で囲まれている。構造は基本的に盛土による裁頭四角錐をなし、各段の基部にのみ人頭大の自然石を３段積んでいる。東面には第２層上まで達する石積みの階段がある。

６号基壇遺構から150m南東に離れ環濠外の東端に位置する２段構造の７号基壇遺構（第１段辺長8m）の頂部から、時期を示す重要な遺物が発見されている。それが石製菩薩像（高90cm写真15）である。蓮華座上に坐り転法輪印を結ぶ総髪の菩薩は宝冠を冠り、腕輪と首飾りそして４条の数珠帯(upavita)を着けている。全体的に独自のスタイル[32]を示しているが、装飾の特徴は13-14世紀頃のシンガサリ・マジャパイト（Singhasari-Majapahit）様式とされる（Diskul 1980, 14, 36頁)。またスカンプン川下流では、仏教文化が伝来したスリウィジャヤ時代の７世紀と考えられるパラス・パスマ(Palas Psemah)碑文が発見されている。

この遺跡の石積基壇遺構は遺構の構造そのものにはヒンドゥ・仏教の要素は全くなく、６世紀以前の築造の可能性が考えられる。しかし菩薩像や出土陶磁片より、少なくとも仏教文化が開花していた13世紀まで信仰の対象となっていたことが知られる。この遺跡の石積基壇遺構のどこからもメンヒルが発見されていない事実は、仏教文化伝来後の役割を裏付けている。従ってこのような遺構が、ボロブドゥールの形態を生み出す祖形であった可能性を考えることができる。

2）ジャゴ寺院・スクッ寺院

石積基壇遺構は、ボロブドゥール以後も、ジャワのヒンドゥ・仏教建築に大きな影響を及ぼし続けた。10世紀以降ジャワ文化の中心は東部ジャワのブランタス(Brantas)川流域に移動して、東部ジャワ期と呼ばれる時代になる。この時代には、寺院建築と石積基壇遺構の融合が顕

著になっていく。

ジャゴ(Jago)寺院は、東部ジャワのマラン(Malang)近郊にあり、シンゴサリ王朝のヴィシュヌワルダーナ(Wisnuwardhana)王（在位 1248～68 年）の仏教徒としての墓廟である。現存遺構は 1343 年に再建された可能性が考えられている（千原 1973, 280-289 頁　同 1983, 231,232 頁)。

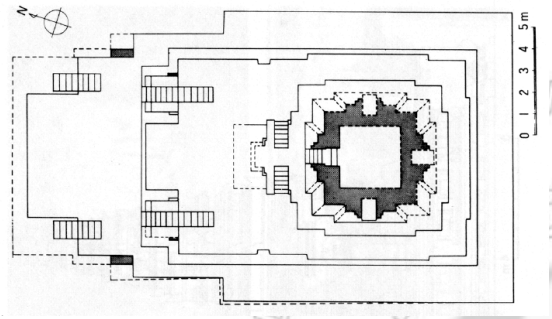


図 11　ジャゴ(千原 1983)

この寺院の特徴は、略長方形の三重基壇そしてその上に建てられた本殿（屋根欠損）の位置が、いずれも後方に偏している点である(図 11)。

	広さ m	高 m
第１基壇	23.5×14	1.98
第２基壇	約 15×9.5	3.47
第３基壇	約 7.3×7.3	1.68
本殿	6.96×6.96	4.0 以上

主軸が 15 度磁北より西にずれているため、本殿の背後の方向がジャワ島最高峰スメル(Sumeru)山の位置になっている。本殿に安置されていたのは不空羂索観音像で、全体に密教像が多く見られる。しかし遺構の設計思想は同心正方形を重視するインド的なものとは大きく離れ、むしろレバッ・チベドゥ遺跡のあり方に類似している[33]。

15 世紀前半の東部ジャワ期末期に建てられた寺院の代表例が、中部ジャワのソロ(Solo)の東 35km ほどに位置するスクッ(Sukuh)寺院である。この寺院はラウ(Lawu)火山の中腹海抜 910m の尾根上に、３段のテラスを連続させる形で築かれた。第３テラスに位置する（千原 1973, 340-358 頁)。

	形状と広さ m	高 m
第１テラス	長方形 48×32	約 2
第２テラス	L 字形 48×35	約 2
第３テラス	逆 L 字形 55×52	約 2
本殿	略正方形 15×15	6

本殿（写真 16）は安山岩切石を段上に積んだ裁頭ピラミッド型をし、頂部には木造建築が載っていた痕跡があり、かつてリンガが安置されていた[34]。

重要なことは、次第に高くなるテラスを登り詰めた最奥にピラミッド建築があり、さらにその背景がラウ山の頂上である点である。この構成はジャゴ以上にレバッ・チベドゥ遺跡と近似している。特にピラミッド形態の本殿の様相を見れば、ほとんど同一の思想で建てられたと言わねばならない。

（３）石積基壇遺構としてのボロブドゥール

巨石文化の山岳信仰の中で石積基壇遺構は、スマトラ島南部とジャワ島で発達した。インド系文化伝来以前にピラミッド型と斜面テラス型が成立していたが、その信仰は長く基層文化として維持された。そして中部ジャワ期から東部ジャワ期への流れの中で、インド系文化の在地化を経てピ統合型が誕生した可能性がある。

ボロブドゥールは、自然の丘の上に盛り土をしてそれを切石で覆ったものである。形態から仏教的要素を取り除いてみると、単純な裁頭四角錐をなしているのは明瞭である。しかも内部空間はなく、明らかに外見を重視した設計で、丘陵上の立地からも山をイメージさせている。また四辺中央に階段がはっきりと設置されてあり、祭祀場である頂部に登ることが重要な要素になっている。

この特徴は、ピラミッド型の石積基壇遺構と本質的に変わらない。現状で最も近い資料は、プグン・ラハルジョ遺跡 6 号遺構になる。もち

ろん同遺構は各段の裾部に自然石を積んだだけで、切石で全ての面を覆ったボロブドゥールとは大きな差はある。また段数もボロブドゥールの側面が５段に対して、同遺構は全３段しかない。

しかしそれらは規模の差から生じた違いであり、どの方向から見ても同じに見える裁頭四角錐をなしていることは変わりない。この形状は、頂部で祭祀行為を行うことを前提にした人工の山を企図したと言える。

発見された資料はまだ少ないが、インド系文化渡来以前にピラミッド型の石積基壇遺構はスマトラ南部に集中していた可能性がある。また統合型の成立にはスマトラとジャワの文化の融合が想定でき、それはインド系文化の渡来以後である可能性は高い。

そのような石積基壇遺構の流れを見ると、次のようなボロブドゥールとの関係が想定できる。本来スマトラ南部に中心があったピラミッド型が巨大化する延長にボロブドゥールは位置した。仏教的要素を付与しながらピラミッド型のボロブドゥールが中部ジャワに誕生した結果、その影響を受けてテラス型しかなかったジャワに統合型が誕生するようになる。恐らく中部ジャワ期においては、レバッ・チベドゥのようにインド系文化国家とは別に並立する在来文化圏でそれは発生した。東部ジャワ期になると、インド系文化寺院までがジャゴなどのように統合型石積基壇遺構の要素を強めるようになっていった。

つまりボロブドゥールは、石積基壇遺構が先史時代から歴史時代まで継続して発展していく中で、スマトラ南部とジャワのものが融合する過程で決定的な役割を果した、と考えられないだろうか。碑文研究からは、シャイレンドラ王朝はスマトラ南部に重要な拠点があったスリウィジャヤと密接な関係を持ったとされる。それはボロブドゥールを中心においた石積基壇遺構の流れの理解と、大きな齟齬はないと思われる。

なおホロブドゥールとピラミッド型石積基壇遺構の側面形状は、次表のとおりである。

	初段長 A	頂部長 B	段部高	B/A	C/A
ボロブドゥール	92	59	13.7	0.64	0.15
ミンキッ	8.5	4.0	2.2	0.47	0.26
S・サクティ	7.5	2.5	1.7	0.33	0.23
レバッ・チバドゥ	19	5.5	6	0.29	0.32
P・ラハルジョ	14	——	6	——	0.43
スクッ本殿	15	6.8	6	0.45	0.40

ボロブドゥールが飛び抜けて扁平であり、また方形段の傾斜が急であることを示している。これは方形段上面を広く取ることを当初から意識していたためであろう。

6　アジア東部の古代海上交流と仏教伝播

この仏塔ボロブドゥールと日本の特殊塔にどのような関係があるのか、本論の中心課題を検討してみたい。

（1）　遺構の共通性

ボロブドゥールと３塔の形態またレリーフなど共通する点を考え、また関連否定説に反論してみよう。

1)　形態と機能

頭塔・土塔・熊山石積遺構とボロブドゥールの形態について、斉藤忠が行った比較は次の通りである（斉藤 2002，281頁）。

	ボロブドゥール	頭塔	土塔	熊山
基壇辺長ｍ	111.5	25	56	9.2
高さｍ	31.5	7.5	8	4.0
高さ/辺長	0.28	0.30	0.14	0.43

この数値について、「いずれも広さの割合に低平であり、ことに頭塔は、ボロブドゥールの割合とかなり近似している。必ずしも偶然の一致ともみなされ難いものがある。」と斉指摘した。

前筆者は、基壇上の方形段の上下辺と高さの関係を比較した。

	ボロブドゥール	上層頭塔	土塔	熊山
第１段長A	92	24.8	46.6	7.9
最上段長B	59	6.4	10.4	3.6
方形壇高C	13.7	6.8	7.4	3.2
B/A	0.64	0.26	0.22	0.46
C/A	0.15	0.27	0.16	0.40

第１段長に対する高さの比は土塔と近い。方形壇頂部の辺はボロブドゥールがかなり長いが、これは頂部構造物の差と考えられる。この数値だけを見るとばらついているように見えるが、中国の代表的な楼閣式塔である大雁塔の高さ比は 2.56 である。密檐式も含めて同程度以上になり、基本的に1.0以下の高さ比になることはありえない。このばらつきは、そのような水平方向に偏した構造における上面の利用方法の差である。

８世紀までのアジア各地の仏塔は、スリランカ、ミャンマー、中国などいずれも垂直方向に巨大化し、水平方向に広がったものは極めて少ない。天に延びるものを指す「塔」という言葉のイメージも、すでに確立されていたはずである。

斉藤の指摘も踏まえながら構造の特徴を考えてみると、まず内部に空間を持たないことが共通する。龕は外から礼拝するもので、外観要素である。そのために基壇と方形壇の大きさに差が作られて、回廊となった。これは中国系の仏塔には見られない点である[35]。

これらの塔の形態には、サーンチー仏塔以来の周囲を巡って祈る、という機能がある。それは堂内での仏像への礼拝に比べ、多人数の要素が強い。レリーフや仏龕などがない土塔も、基壇と方形壇は明確に分かれている。土塔での人名瓦の奉納は、そのような礼拝行為との関係も考えられる。

重量感のある視覚効果は山をイメージしやすくし、山岳信仰と関係していると言える。

2）仏像・レリーフの共通性

ボロブドゥールは、仏像・レリーフの配置が極めて規則的である。その要点を再度示すと次のようになる。

1　仏像は垂直位置では、釈迦牟尼仏を上位とし、中位に毘盧遮那仏、そして下位に四方仏が配置される。

2　四方仏は、東面：阿閦仏、西面：阿弥陀仏、南面：宝生仏、北面：不空成就仏となっている。釈迦牟尼仏と毘盧遮那仏は方位性を持たない。

3　仏像には菩薩像は見られず、隣接するムンドゥ寺院のような三尊配置はない。

4　レリーフは、華厳経入法界品を上位とし、中位にジャータカと方広大荘厳経、そして最下位に分別善悪応報経となっている。

5　レリーフは内容の連続的展開を示すため、方位との関係は見られない。

それに対し、頭塔のレリーフの特徴は次のとおりである。

1　仏像表現と説話表現に大別できる。

2　仏像表現では毘盧遮那仏を上位とし、下位に四方仏を配置している。

3　説話表現では、シビ王本生（ジャータカ）や善財童子歴参図（華厳経入法界品）を第１段と３段に配する。

4　四方仏は、東面：多宝仏、西面：阿弥陀仏、南面：釈迦仏、北面：弥勒仏だが、三尊表現の第１段中央を除いて配置はあまり規則的ではない。

5　第３段と第７段には仏像の背後に建物が多いが、第３段南面中央のみ二階建て表現である。

以上を比べると、次のような類似点がある。

A　全体の配置が上位に仏像、下位に説話となっている（頭塔は規則性が弱い。）。

B　仏像配置は、四方仏と上位仏の構成になっている（個々の比定は異なる）。

C　説話では、善財童子歴参図とシビ王本生が共通する（上下の位置は異なる）。

D　共に４段で表現されている（ボロブドゥールはさらに円形段と隠れた基壇がある）。

一方、明らかな相違点も見られる。

A　ボロブドゥール仏像は単体で菩薩像は存在しないが、頭塔では三尊表現が主体である。

B　頭塔は南面を重要視する傾向がある。

大前提として全体の構成で、他に比較しうる存在がほとんど見当たらないことを注意すべきである。立体的な仏像と説話レリーフが表現

形態は、極めて類似している。このように基本的部分に類似点が多いのは、設計思想そのものがかなり近かったからだろう。シビ王本生のような表現も、そのことを示している。

ただし依拠した仏典や設計思想は外来のものであっても、実際の製作は地元の伝統をもとになされた。頭塔の建物表現が天平期の寺院建築に近似していることは、その現れである。そのため三尊表現のような差があり、また頭塔の南面重視はまさに東大寺との関係を意識したためと考えられる。

熊山石積遺構は龕しかないため比較できないが、似た形状の義城安平塔では西面の龕に残された仏像は阿弥陀仏とされている。四面に龕を設けたのは四方仏の考えで、類似要素と見ることができる。

3) ボロブドゥール類似否定説に対して

頭塔の発掘調査報告書の大部分を執筆した岩永省三氏は、頭塔などの起源に関する東南アジア説（「南方系説」）を次の各点を根拠として否定した（奈文研 2001, 165-166 頁、岩永 2002, 30-32 頁）。

1　菩提僊那は「段台状基壇」を持たないインドの出身者であり陸路唐へ来たと推定されるため、東南アジアの「段台状基壇の塔」についての知識を持っていなかった。

2　菩提僊那と仏哲の来日は 736 年で、土塔の造営開始と考えられる727年より後になる。

3　ボロブドゥールの方形部分はストゥーパを乗せる基壇だが、頭塔の方形部分は塔身で意味が異なり、また瓦の有無が大きく違う。

4　ボロブドゥールの築造年代は頭塔よりも遅れ、また同様の仏塔の類例がない。

1と2の渡来者の問題については後述するが、岩永氏は別の部分で「行基の場合、（中略）中国を突き抜けて天竺を意識していた可能性すらある」と述べている（同書 170 頁）。インドには「段台状基壇」はないのだから、行基が何を意識していたかは問題がある。

ボロブドゥール方形部分は装飾のない最下層2段と仏龕やレリーフで飾られた5段部分に分かれている。確かに方形段は、小塔群が並ぶ円形段の下に位置しているが、そこに多数の仏像やレリーフがあり、参拝者が巡ることを前提に築かれている。このような部分も「基壇」とするなら、サーンチー第1号仏塔の半球形下位に設けられた欄楯を持つテラスも同じことになってしまう。

岩永氏は土塔も含めて方形部分を「塔身」と呼び、「基壇」と区別している。しかしどのような名称で呼ぼうが斉藤が指摘した形状の類似性は事実である。岩永氏が土塔や頭塔の源流と考える中国の「磚塔」に、似た形状の「塔身」があるのだろうか。

瓦の有無については、他文化の建築物受容の過程で起こりうることとして註では決定的要因からは自ら引き下げている。

4は岩永氏が最も強調する要因だが、ボロブドゥールの築造年代は研究者によって大きな幅があり、またどの説を見ても少なくとも半世紀以上かけて築造されたと考えられている。築造開始前には設計構想の期間が当然あり、頭塔の築造時期と重なるとするのが自然である。

類例が少ないことは確かだが、ジャワの仏教化が8世紀前半のある時点で急速に起きた事実を見る必要がある。カラサンやスウの祖形は現在インドネシアでは確認されておらず、スウはバングラデシュのパハルプール(Paharpur)との関係が考えられている(千原 1983, 119頁)。ボロブドゥールに限れば、ピラミッド型の石積基壇遺構がシャイレンドラ王朝と関係のあるスマトラ南部に存在する。中でもプグン・ラハルジョ遺跡のように仏教文化と融合した石積基壇遺構が存在したことは確かである。

報告書で上層頭塔の復原案（図2）を示した浅川滋男は、「立体曼荼羅とでも表現すべき建築物であり、(略)、ボロブドゥールなど南方系の方形段台型仏塔とめざすところは近似している」と述べている（同書123頁）。

（2）南海経由の仏教伝来

ボロブドゥールと日本のピラミッド型塔の類似関係が偶然でないとするなら、当然仏教の伝来経路にそれが現れねばならない。仏教史研究を整理してみたい。

1)　東南アジアと中国の交流

東南アジア経由でインドを訪ねた中国僧の嚆矢は、法顕（337-422）である。西域経由の往路の後、帰路にスリランカを経て413年ジャワに渡っている。その旅行記『仏国記』には、ジャワで一般的な宗教はヒンドゥ教で仏教はない、と記している（田村 1994, 171頁）。これは碑文に示される状況と一致している。

次に阿部慈園は義浄（635-713）の著名な著作『南海帰寄内法伝』と『大唐西域求法高僧伝』をもとに、往復共に東南アジア経由した彼のインド旅行を次のように整理した（阿部 1995, 76-80頁）。

671年　広州より出発
672年　スリウィジャヤに半年滞在後、東インドのタームラリプティ(Tamralipti)到着
674年　ベトナム僧大乗灯と共にナーランダ(Nalanda)僧院到着
685年　タームラリプティより出発しスリウィジャヤ経由で帰国
689年　スリウィジャヤへ出発
695年　スリウィジャヤより帰国

このように義浄の旅程には、スリウィジャヤが大きな要素を占めている[36]。それはここが季節風の変換点という地理的な要衝であったばかりでなく、千人の僧侶がいる仏教国家だったからである。最後の7年間の滞在は経典の翻訳が目的で、サンスクリット語から中国語への翻訳には、スリウィジャヤの言語「崑崙語」（古マレー語）が欠かせなかったからである。

その結果、『大方広仏華厳経』『根本説一切有部毘奈耶』『金光明最勝王経』などを訳出した。華厳経はボロブドゥールのレリーフの重要な主題で、金光明最勝王経と共に東大寺を中心とする奈良仏教の中心経典になった。華厳宗の確立に大きな役割を果した義浄にとって、スリウィジャヤは多大な影響を受けた地域とも言える。「唐の僧でインドに赴いて仏法を学ぼうとする者は、ここに一両年滞在して、その法式を習った後にインドに赴くがよい。」と、義浄は記している（岩本 1973, 261頁）。

そのため8世紀までに唐で確立され新羅に伝えられた華厳仏教には、スリウィジャヤでの仏教思想が少なからず混在した可能性は十分考えられる。

次に密教成立過程の問題がある。

唐で8世紀前半に確立した密教をもたらしたのは、716年に西域から渡来した善無畏（シュパッカラシンハ Subhakarasimha）と並んで、720年に東南アジアより来航した金剛智（671-741 ヴァジュラボーディ Vajrabodhi）と不空（705-774　アモーガヴァジュラ Amoghavajra）の役割が大きい。前者が北インドで確立した大日経系密教をもたらしたのに対し、後者は南インドで成立した金剛頂経系密教を伝えたとされる。

南インド出身の金剛智は、スリランカ生まれとも推定される不空と718年にジャワで出会ったとの伝承が『貞元新定釈教目録』に記され、金剛智が唐への来航以前にスリウィジャヤに立寄ったことが『宋高僧伝』にある[37]。

南伝密教の系譜を考えてみると、不空が743年に渡航したことからも、スリランカ[38]の存在が重要になってくる。7世紀末頃に南インドのアマラーヴァティ周辺で成立した金剛頂経は、金剛智によって8世紀初めにアバヤギリにもたらされた。741年には不空はスリランカに至り、そこから多くの密教経典を唐に持ち帰った。航海における季節風の問題もあり、この時のスリランカ往復に際して不空が中部ジャワに立寄った可能性も十分ありうる[39]。

中部ジャワの密教痕跡を探してみると、ボロブドゥールに接するムンドゥ寺院のレリーフに表現されている八大菩薩が注目されている。このレリーフと本堂内の菩薩像を詳細に調査した松長恵史は、それを金剛智と不空がそれぞれ漢訳した経典の記述と酷似していることを指摘した（松長 1994, 216-217頁）。もちろんボロブドゥールの各仏像のあり方そのものが、密教によるものであることは多く論じられている[40]。

以上により、唐での華厳宗及び密教の成立には、スマトラとジャワが大きな役割を果したことは明らかである。

2)　奈良仏教と東南アジア

そのような唐での新しい仏教は、どのように日本に伝来したのだろうか。8世紀の唐から日本への交通（上田 2006）を整理すると、次の

ようになる。

義浄は695年に帰国し、713年に死亡するまで長安で訳経を継続した。義浄が訳した華厳経や金光明最勝王経は、養老2（718）年に唐より帰国し大安寺に入った道慈が招来した。その前年の養老1（717）年、行基の布教活動に対する禁令が出されている。そして10年後の神亀4(727)年、行基は大野寺土塔を着工した。

土塔の設計思想がそれまでの仏塔概念と全く異なっていることは、誰もが認めている。必ず外来思想が、行基に伝わっていたはずである[41]。布教禁令6年後の養老7（723）年、三世一身法により農地の開墾活動が奨励されると、行基は神亀3（726）年の大鳥郡檜尾池と隣接する寺の造営を行っている。これ以降、行基の布教土木活動は政府の政策と一致するようになり、やがて天平3（731）年行基の高齢弟子の出家が公認された。

つまり神亀3年以降、行基の活動はしだいに政府から奨励されうるようになっていった。そのため官寺である大安寺に行くこともでき、道慈から新しい仏教思想を得ることができたのではないだろうか。その直後に近隣地で行った大野寺土塔の築造は、大門池とセットになった。集団礼拝が可能というピラミッド型仏塔は、記念碑的意味で造営されたと考えられる。

この経緯で伝わったのは、義浄が招来した華厳系の思想であり、そこには彼が長く滞在していたスリウィジャヤの状況が付加された可能性は高い。

次に頭塔と熊山石積遺構の問題である。

天平8（736）年、遣唐使中臣名代の帰国船第２船で、婆羅門僧正菩提僊那（ボーディセナ）と林邑僧仏哲が来日し、大安寺に入った。

没後の伝記とされる『南天竺婆羅門僧正碑並序』には、唐への渡来の時期や経路ははっきりとは記されていない。南天竺を南インドと理解できるのかも不明である。ただ同行者の仏哲は、林邑僧と明記されており、唐の領域に接する中部ベトナムのチャンパ出身であることは確かだろう。唐での菩提僊那と仏哲の関係は、少なくとも同行して日本に来るほどのものだった。そのため、菩提僊那が海路東南アジア経由で、唐へ来た可能性はありうる。後に天平勝宝4（752）年、大仏開眼供養で菩提僊那は開眼導師として仏哲と共に大きな役割を果す[42]。

菩提僊那は華厳経を諳んじると共に、「呪術」に巧みだったとされる。これは同じ遣唐使船の第1船で帰国した玄昉にも使われた形容である。723年に金剛智が金剛頂経を、725年には善無畏が大日経を漢訳している。それ以後、唐の仏教は密教化が進んだ。この「呪術」とは、密教的な修法を指していると考えてよいだろう。菩提僊那の来日は奈良仏教の密教化の最初の節目だったと見ることができる。

大仏開眼の年に、東大寺の実忠は二月堂を建てた。今日まで続くそこでの修二会は、この時から始まったと言われる。闇夜に大松明が駆け抜ける修二会のあり方を、斉藤忠は「かなりインド的な行事の要素が含まれている」とした（斉藤 2002, 281頁）。密教的な雰囲気が濃厚だが、それは菩提僊那が伝えた可能性がある。

本格的な密教の唐への伝来は、不空のスリランカ往復（743～746年）以後となる。その密教の情報が日本へもたらされた可能性が高いのは、天平勝宝5（753）年の遣唐使大伴古麻呂の帰国時である。

この時来日したのが、鑑真一行だった。揚州大明寺にいた鑑真は742年以来たびたび日本への渡航を試み、ようやくこの時に目的をかなえたことは良く知られている。注意すべきは『唐大和上東征伝』によれば、鑑真の随行者にペルシャ人などと共に崑崙国人の軍法力が入っていたことである。崑崙は西域を指す場合もあるが、義浄が用いたようにマレーあるいはジャワを意味する用法もある。唐代の揚州が広州と並んで東南アジアとの交流が深い港だったことを考えると、この人物はジャワから来た可能性もある。

鑑真一行渡来の7年後の天平宝字4(760)年、実忠は良弁の目代として造東大寺司の中枢を担っているが、下層頭塔の着工はこの年と考えられている[43]。そして天平宝字8（764）年、恵美押勝の乱を経て、実忠は、神護景雲1（767）年に上層頭塔を完成させた。

下層頭塔は仏龕があったが熊山石積遺構に類似した3段であり、上層頭塔とはかなり異なっている。この設計変更が外来の新知識によって

いたとするなら、公的な唐からの情報伝達の可能性は天平宝字５（761）年に帰国した遣唐使高元度しかいない[44]。

実忠は東大寺の初代別当良弁の弟子であり、権別当として大きな役割を果たした。天平神護１（765）年には、良弁の命で東大寺南春日谷に堤・池を造るなど、東大寺に関係するさまざまな土木事業を統括していた。最大の官寺である東大寺でのそのような地位は、当然外来のさまざまな情報の入手を可能にする。

中世の『東大寺縁起』の中で、「実忠和尚、天竺人也、花厳宗」（「当寺碩徳事」『続群書類従』釈家）と記されていることに対し、斉藤忠は「史実とはみとめ難いとしても、何かインドに関係のあったことを思わしめる」と考えた。そして「いずれにせよ、実忠の場合、南海を通じ、インドの文化をみちびき得る可能性のあったことは考慮してよい」と指摘した（斉藤 2002, 281頁）。

不空の密教思想は、上層頭塔建設までの間に上記のような公式ルートによっても伝来していたことは確かである。そして鑑真随行者の崑崙人が、ボロブドゥールの設計思想を伝えることも不可能ではない。

時期的に見れば、上層頭塔は百万塔と同じように道鏡政権下でなされている[45]。百万塔の設置と同様に上層頭塔への改変も道鏡の意図が働いていたとするなら、新しい密教系の情報を得ることはさらに容易だったと考えられる。

7　まとめ–交流の意味

以上、奈良時代の特殊塔と呼ばれる頭塔など３塔と、インドネシアのボロブドゥールの関係を検討してきた。この検討結果を要約すると次のようになる。

1　頭塔などの３塔は、内部に空間を持たない階段状ピラミッド形態で、周囲を巡っての礼拝を基礎にした仏塔である。いずれも水平方向が長い形状をしている。

2　このような形態の仏塔は、中国はもちろんインドでも見られず、僅かにボロブドゥールとその影響を受けた東南アジアの仏塔数例にしか確認できない。

3　ボロブドゥールはスリランカ様式仏塔の影響を受けるが、全体の類似形態は仏塔にはなく、インドネシア在来の巨石文化起源の石積基壇遺構が出発になっている。

4　８世紀前半に中部ジャワではシャイレンドラ王朝のもと、密教的様相を持つ大乗仏教文化が急速に発展した。ボロブドゥールは象徴的存在として760年頃に建立が始まり、完成までには半世紀以上を要した。

5　華厳宗確立に大きく貢献した義浄は、シャイランドラと深い関係を持つスマトラのスリウィジャヤに長く滞在し、そこで影響を受けた。義浄の思想は土塔建立以前に大安寺道慈が奈良に伝えており、行基はその情報を知ることが可能だった。

6　唐の密教成立にはジャワが大きくかかわっており、その思想は菩提僊那や鑑真などを通じて頭塔建立以前には、確実に奈良にもたらされていた。建立者の実忠は、その最新思想を十分知りうる立場にあった。

それらの経緯により、日本の特殊塔３塔とボロブドゥールは類似することになった。それは遠距離の文化交流として容易に想定できるものではないかもしれないが、仏教思想の伝播過程を広く眺めるならばその「特殊」性の繋がりは十分に理解できることである。

８世紀には、各地の文化は外来的な要素と在地的な要素の併存が問題にはならなかった。その状況は遺物では正倉院伝世品に明らかなとおりだが、遺構として見られるのが３塔とボロブドゥールと言える。そこに我々は壮大な文化交流過程を確認することができる。

なお韓半島の類似塔の意味は、さらに検討されねばならない。また中継地の中国大陸にも、同様の塔が発見されることを期待している。

参考文献

阿部慈園　1995「天竺への旅—法顕・玄奘・義浄のたどった道—」『インド・道の文化誌』春秋社。

阿部龍一　2004「奈良期の密教の再検討—九世紀の展開をふまえて—」『奈良仏教と在地社会』岩田書院。

足立　康　1933「頭塔に関する一考察」『古代文化研究』6（1944『日本彫刻史の研究』に再収）。

----------　1987『塔婆建築の研究』中央公論美術出版。

Ambary, Hasan M. 1984. Penelitian Arkeologi yang Baru di Sumatera. *Amerta* no.7, Pusat Penelitian Arkeologi Nasional, Jakarta.

Anom, I G.N. ed. 1997. *Hasil Pemugaran Benda Cagar Budaya PJP I (Lanjutan),* Dep.Pendidikan dan Kebudayaan, Jakarta.

東潮・田中俊明　1988『韓国の古代遺跡　1 新羅編(慶州)』中央公論社。

Bintarti, D.D. 1981. Punden Berundak di Gunung Padang, Jawa Barat. Amerta 4, Pusat Penelitian Arkeologi Nasional, Jakarta

Casparis, J.G.de 1950. *Prasasti Indonesia I, Inscripties uit de Sailendra-tijd*, A.C.Nix, Bandung.

千原大五郎　1973『インドネシア社寺建築史』日本放送出版協会。

---------- 1983『東南アジアのヒンドゥ・仏教建築』鹿島出版会。

Diskul, M.C.Subhadradis ed.1980. *The Art of Srivijaya*, Oxford University Press – UNESSCO.

Dumarcay, J. 1977. *Histoire architecturale du Borobudur*, Publications de l'Ecole Francaise d'Extreme-Orient, Memoires Archeologiques XII.

Dupont, Pierre 2007. Archaeology of the Mon of Dvaravati, White Lotus, Bangkos

江上幹幸　2001「レバッ・チベドゥ遺跡とバドゥイ族—西ジャワの石積基壇遺構—」『沖縄国際大学社会文化研究』5-1。

福山敏男　1932「頭塔の造立年代について」『考古学雑誌』22-6。

---------- 1982『寺院建築の研究』。

布野修司　2003「仏教建築の世界史」『アジア都市建築史』昭和堂。

Jacq-Hergoualc'h, M. 1992. La *civiliasaton de ports-entrepots du Sud Kedah (Malaysia) Ve XIVe siecle*. Paris.

長谷川周 2006a『インド仏塔紀行』東方出版。

----------2006b『中国仏塔紀行』東方出版。

干潟龍祥　1961『ジャータカ概観』鈴木学術財団。

---------- 1994「中部ジャワの密教—ボロブドゥール大塔の意味するもの—」『密教大系２中国密教』法蔵館。

Hoop, A.N.J.Th.A.Th. van der 1932. *Megalithic Remains in South-Sumatra*, W.J.Thieme & Cie, Zutphen.

井尻　進　1924『ボロブドゥル』大乗社（1947 年に中公文庫として再刊行）。

林永珍　1989「三国時代　百済（ソウル地区）」『韓国の考古学』講談社。

井上　薫編　1996『行基菩薩千二百五十年御遠忌記念誌』行基菩薩ゆかりの寺院。

石田茂作　1958「頭塔の復原」『歴史考古』2（1969『日本の仏塔』に再収）。

---------- 1969「土塔について」『日本の仏塔』。

---------- 1969『日本仏塔の研究』講談社。

---------- 1977『仏教考古学論攷４　仏塔編』思文閣。

石井和子　1992「ボロブドゥールと『初会金剛頂経』—シャイレーンドラ朝密教需要の一考察」『東南アジア歴史と文化』21。

伊東忠太　1900「日本仏塔建築の沿革」。

伊東照司　1988『インドネシア美術入門』雄山閣。

---------- 1998『ボロブドール』山川出版社。

岩本小百合　1996「「シュリーヴィジャヤ」時代におけるクダー—いわゆるルンバ・ブジャン遺跡について—」『東南アジア考古学』16　東南アジア考古学会。

岩本　裕　1973「インドネシアの仏教」『アジア仏教史インド編 VI　東南アジアの仏教』佼成出版社。

岩永省三　2002「行基と頭塔に接点はあるか」『行基の考古学』塙書房。

秦弘燮　1971「所謂方壇式特殊形式の石塔数例」『考古美術』110。

--------- 1974「所謂方壇式特殊形式の石塔」『考古美術』121-122。

辛島昇・坂田貞二編 1999『世界歴史の旅　南インド』山川出版社。

金基雄　1976『百済の古墳』学生社。

Krom, N.J.& Erp, Th. van 1927-31. *Archaeological Description of Barabudur*, M.Nijhoff, The Hague (reprint 1993 by Rinsen Book Pub., Kyoto).

近藤康司　2002「大野寺を考古学する」『行基の考古学』塙書房。

熊山町教育委員会　1974『熊山遺跡　岡山県赤磐郡熊山町史跡熊山遺跡緊急調査概報』。

松長恵史　1994「チャンディ・ムンドゥーの八大菩薩」『密教体系 10　密教の美術 I』法蔵館。

Michlob, Halwany 1993. *Lebak Sibedug dan Arca Domas di Banten Selatan*, Suaka Peninggalan Sejarah dan Purbakala Prop. Jawa Barat, DKI Jakarta dan Lampung, Serang.

Miksic, John 1990. *Borobudur Colden Tales of the Buddha*, Peripulus, Singpore.

---------- 1998. From prehistory to protohistory, *The*

Encyclopedia of Malaysia vol.4 Early History, Archipelago Press, Kuala Lumpur.
持田信夫　1971『ボロブドール』講談社。
森　蘊　1971『奈良を測る』。
森　浩一　1957「大野寺の土塔と人名瓦について」『文化史学』13。
村田次郎　1989「中国の楼閣形塔婆の起源」『中国建築史叢考―仏寺仏塔編―』。
奈良国立文化財研究所　2001『史跡頭塔発掘調査報告』奈良国立文化財研究所学報第62冊。
根本誠二　2006「道鏡と鑑真」『奈良・平安仏教の展開』吉川弘文館。
西村　貞　1957「奈良頭塔の石仏」『仏教芸術』30。
沼田頼輔　1925「備前熊山戒壇遺跡考」『考古学雑誌』15-6。
大林太良編 1987『世界の大遺跡 12 アンコールとボロブドゥール』講談社。
近江昌司　1973「備前熊山仏教遺跡考」『天理大学学報』85　天理大学学術研究会。
ローソン、フィリップ 2004『東南アジアの美術』めこん。
斉藤　忠　1938「狼山麓の一遺構趾」『昭和十二年度古蹟調査報告』。
----------　1972「わが国における頭塔・土塔等の遺跡の源流」『大正大学研究紀要』57。
----------　2002『仏塔の研究　アジア仏教文化の系譜をたどる』第一書房。
坂井　隆　1990「西部ジャワの石積基壇遺構覚書―グヌン・パダン遺跡踏査記―」『インドネシア文化の構造とその展開』早稲田大学社会科学研究所。
----------　1995「マラッカ・スンダ海峡港市の陶磁器」『古代探叢Ⅳ』早稲田大学出版部。
堺市埋蔵文化財センター　2006『史蹟土塔―文字瓦聚成』、堺市教育委員会。
佐々木教悟　1973「スリランカの仏教」『アジア仏教史インド編Ⅵ　東南アジアの仏教』佼成出版社。
佐藤小吉　1916「頭塔山ノ石仏」『奈良県史蹟勝地調査会報告書（第3回）』。
佐藤正彦　1996a『北インドの建築入門』彰国社。
----------　1996b『南インドの建築入門』彰国社。
佐和隆研　1971『インドネシアの遺蹟と美術』日本放送出版協会。
関野　貞　1922「南北朝時代の塔と健陀羅塔との関係」『建築雑誌』427。
Soekmono, R. 1976. *Chandi Borobudur, A monument of mankind*, Unesco.
申營勳　1975「陵旨塔の構成」『考古美術』128。
Stutterheim, W.F. 1929. *Tjandi Baraboedoer; naam vorm, beteekenis*. (1956 Candi Borobudur: Name, Form, Meaning, "Studies in Indonesian Archaeology", M.Nijhoff, The Hague).
杉本卓洲 1993『インド仏塔の研究』平楽寺書店。
----------2007『ブッダと仏塔の物語』大法輪閣。
Sukendar, Haris 1979. *Laporan Penelitian Kepurbakalaan Daerah Lampung*, Berita Penelitian Arkeologi no.20, Pusat Penelitian Purbakala dan Peninggalan Nasional.
----------1985. *Peninggalan Tradisi Megalitik di Daerah Cianjur, Jawa Barat*, Pusat Penelitian Arkeologi Nasional, Jakarta.
----------2002. *Pugungraharjo Masa Lalu (Tinjauan Arkeologi Selayang Pandang)*, Jakarta.
田村隆照　1994「ジャワへの密教伝播」『密教体系 10　密教美術 I』法蔵館。
巽淳一郎　1989「頭塔の調査　第 199 次」『昭和 63 年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』。
Thaw, Aung 1972. *Historical Siets in Burma*, The Ministry of Union Culture, Government of the Union of Burma.
上田　雄　2006『遣唐使全航海』草思社。
梅原末治　1950「古代施釉窯器の新資料―備前熊山戒壇出土品其他―」『史迹と美術』202。
----------　1953「備前熊山上の遺跡」『吉備考古』86。
Wales, H.G.1969. Dvaravati: the earliest kingdom of Siam (6th to 11th century AD), Quaritch, London.
横倉雅幸　1995「ヤラン遺跡の発掘」『東南アジア考古学』15。
吉田靖雄　1987『行基と律令国家』。

註

---

1) 中国の楼閣式系統以外の塔をストゥーパ stupa と呼称することが多い。しかしストゥーパは仏塔と同義あるいは語源であることを考え、本論では全ての仏教系の塔を仏塔と呼ぶ。

2) 東大寺南大門の中軸線から頭塔の位置は 100m ほど西にあたるが、この立地について発掘調査報告書は「平城京の街の中からは、構築物を最大限効果的に見せることのできる」ため「中軸線をはずして、地形条件を重視して、視覚的効果の大きい位置に配置した」可能性を述べている（奈文研 2001, 104-106 頁）。

3) これらの中で「抜き取り」とは龕そのものが石仏と共になくなっているもので、「なし」とは龕は残っているものである。

4) 類例が呉越王銭弘俶塔や京都報恩寺の白檀仏龕にあると注記されているが、銭弘俶塔は五代、報恩寺仏龕は北宋の中国製品である。そのためシビ王本生を描いたもとのとしては、このレリーフが古い。

5) 筆者は特に蓋部の形状から見て、ヒンドゥ教のシヴァ神のリンガ linga（男根像）でないかと考えた（坂井 1990, 46 頁）。近江の欠損部分の指摘を受け入れると、相輪説も妥当と見なすことができる。

6) 「高僧の墓」と想定しているが、類例が限られたここの被葬者を限定しその造墓思想を明確にしなければ、それは理解しがたい。

7) 中世初頭の東大寺再建にあたって瓦生産地が熊山に選定された理由が関係するかもしれない。

8) 狼山北嶺東麓には、706 年建立の伝皇福寺三層石塔が存在する。皇福寺は新羅に華厳宗を伝えた義湘が剃髪した寺として知られている。

9) 韓半島では形態的に類似した積石塚古墳が存在する。ソウルの石村洞古墳群（林 1989, 136-138 頁、金 1976, 28 頁）は３段築成の積石塚で、４世紀の４号墳は規模や外見が義城塔や安東塔に近い。また５世紀初頭の高句麗の集安将軍塚は、切石による７段築成のピラミッドである。陵旨塔の南東 7km にある８世紀後半の九政洞方形墳（一辺 9.5m、高約 3m）は、切石を３段積んで方形マウンドの周囲に巡らしている。

10) 前２世紀とされるマデャプラデッシュ州バールフット(Bharfut)のレリーフ塔とほぼ同形である。また同様の仏塔は同時期のバージャ(Bhaja)石窟第 12 窟やカールラー(Karla)石窟第８窟でも見られる。

11) 同じ状況を示すチャールキヤ(Chalukya)朝時代のエローラ(Ellora)石窟第 10 窟では、三尊仏の背後にある塔の覆鉢は半球形からつぶれた球形に変化し、下半部は高い円筒形になっている（総高 8m）。

12) 同形同名の寺院がミャンマーのバガンに 13 世紀に建立されており、それより遡る可能性はある。

13) 基壇には仏座像が彫られた５基の龕が並んでいる。

14) シュエジーゴンなど初期ビルマ様式には、基壇にテラコッタや緑釉陶板製のジャータカ・パネルが嵌められていることも注意を要する。

15) 全体の形状は、バージャ第 12 窟の塔に似ている。この塔画像の両側にパッラヴァ文字サンスクリット語の碑文があり、航海者ブッダグプタの名が記されている。5 世紀中葉頃と推定されている。

16) 蓮華座から上は、アジャンター第 10 窟やカールラー第８窟にかなり似る。基壇部分は、覆鉢頂部までの高さの３分の２近くになっている。形状に違いがあるが、この割合はエローラ第 10 窟の塔に近い。

17) 早くからインド文化の影響がもたらされたメコン川水系では、仏教は７世紀にはカンボジア南部のタケオ(Takaev)地方に伝わったことは確かだが、仏塔はまだ発見されていない。

18) 斎藤が述べるようなサーンチー塔の模倣というより、基本的に日本の百万塔の形状に近い。

19) 敦煌で興味深いのはそれが重なったり、下位に多層の楼閣が加わるものが多くあるという（斎藤 2002、141 頁挿図 37）。

20) 布野修司は密檐式の成立について、北方型ヒンドゥ教寺院の高塔（シカラ）からの影響を述べている（布野 2006、83 頁）。

21) 類似性が感じられるアンコールのバコン(Bakon)やプノム・バケン(Phnom Bakheng)は９世紀後半の建立である。

22) チャンガル(Canggar)碑文の 732 年以降、リゴール(Ligor)碑文の 775 年以前。

23) 現在の基壇の背後にある隠れた基壇の幅は、方形段の傾斜に近い。さらに第１円段以上が当初現在とは異なった姿で設計されていたことも、20 世紀初頭のオランダの修復の際に指摘されている。

24) 伊東照司は隠れた基壇については出典経典が不明の天界と地獄とし、また第４回廊主壁については、それまでと同じ華厳経入法界品の続きであるとしている（伊東 1998, 52-53 頁）。

25) 釣り鐘型は華厳経入法界品部分のみに一部見られる。

26) 釈迦牟尼仏：転法倫印、毘盧遮那仏：法界説法印、阿閦仏阿仏：触地印、宝生印：施与印、阿弥陀仏：弥陀定印、不空成就仏：無畏印。

27) 筆者は中部ジャワ期の仏教寺院の屋蓋に、次の形態差を認める。１釣り鐘型：ボロブドゥール、カラサン、ムンドゥ(Mundut)、スウ、２卵形：パウォン(Pawon)、北プラオサン(Plaosan)、サリ(Sari)、（ロロジョングラン Loro Jonggrang）、３多層型：ンガウェン(Ngawen)、南プラオサン　釣り鐘型は覆鉢が撫で肩の隅丸方形で、裾が少し外反する。上部には水平方向に広がった平頭が明瞭である。卵形は覆鉢が垂直方向に延びて、下半部が少し内反傾向になる。平頭は小さくなり、傘蓋が変化した角柱との差が少ない。多層型は全く覆鉢の形状をとらない。ボロブドゥールのレリーフ塔表現には１例卵形があり、１から２への順序での変化が想定できる。

28) 描かれた銅鼓から、石像は西暦紀元後数世紀頃が想定される。

29) 例えばジャワ島東部のアルゴプロ(Argopuro)山中のヤン(Yang)高原（千原 1982, 19-20 頁）やスラウェシ南東部のクンダリ(Kendari)のラキデンデ(Lakidende)遺跡（Anom 1997, 218 頁）。しかし西部ジャワのチアンジュール(Cianjur)地方では、特に密度が濃い（Haris 1985）。

30) 現状の最頂部は第８段だが第９段の存在が想定されている。

31) 江上はこの遺跡を、隣接山中に孤立して棲むバドゥイ(Baduy)人との関係で考えた。彼らは外部のイスラーム教徒との接触を拒み、焼畑耕作を基盤とする祖先崇拝が社会の根幹になっている。しかしこの遺跡自体は彼らの居住域ではなく、信仰対象になっているわけでもない。

32) 近郊のボジョン(Bojong)で発見された巨石文化石像がある。全体のイメージはかなりこの菩薩像に似ており、また背後の腰紐に差した短剣は、ジャワのクリスを思わせる。この地域の巨石文化が歴史時代まで残存していたことを示す資料と言える。なお東環濠内で発見された陶磁片には、10 世紀の広東西村窯鉄絵、13–15 世紀の竜泉窯及び福建

系青磁、15 世紀の景德鎮青花が含まれていた（坂井 1995、625–627 頁）。

33) このような複合型石積基壇遺構に類似した寺院建築は、パナタラン(Panataran)寺院主殿など 14 世紀のマジャパイト王朝最盛期に顕著に見られ、千原は東部ジャワ期復古様式と呼んでいる。

34) 第３テラスの石造物には、ガルーダや亀などヒンドゥ的な神像ながら怪奇な表現方法が顕著で、また性神崇拝レリーフも存在する。ヒンドゥ教というより、ジャワ神秘主義を基本としたとするのが妥当な状態である。

35) 韓半島に多数存在する石塔の多くも内部に入ることはできないが、それは素材として板石が使われたためであって、本来の形状が中に入れる中国の楼閣式や密檐式の塔であったことは間違いない。

36) スリウィジャヤ研究では義浄の記録は第一級の史料である。ナーランダ僧院ではスリウィジャヤ・シャイレンドラの名を記した 850 年頃の碑文が発見されている。義浄の記録にはインドを目指した８人の韓半島僧が記されているが、２人はスマトラで没している。

37) この伝承を干潟龍祥は可能性を肯定し、8 世紀初頭のジャワでも仏教が全くなかったとは言い切れないとした（干潟 1994, 372 頁）。田村隆照も同様で、さらに全てのシャイレンドラ碑文に密教関係の菩薩名が記されていることを指摘している（田村 1994, 172–176 頁）。

38) 佐々木教悟によれば、スリランカには前 3 世紀には早くも上座部仏教が伝えられ、アヌラダプーラのマハー・ヴィハーラが拠点となった。後 3 世紀に大乗仏教が伝来し、アバヤギリ・ヴィハーラを根拠地とするようになった。法顕は 410 年頃から 2 年間、そのようなアバヤギリ・ヴィハーラに滞在した（佐々木 1973, 80-91 頁）。また 7 世紀末以降、アヌラダプーラの政権は南インドのパッラヴァ朝と深い関係があった。

39) スリランカとの関係は、トゥーパーラマ塔とパレンパン出土のミニチュア塔そしてボロブドゥールの塔の形状類似からも理解できる。密教の誕生地東インドについても、ナーランダでシャイレンドラの碑文とサルナート様式のボロブドゥール仏像から深い関係が想定される。

40) 岩本裕は五仏を金剛界五禅定仏の立体的表現とし（岩本 1973, 289-290 頁）、田村隆照は密教系五仏とし（田村 1994, 178-179 頁）、干潟龍祥はボロブドゥール全体を立体羯磨マンダラと考えた（干潟 1994, 393-394 頁）。また石井和子は、不空訳の「初会金剛頂経」とボロブドゥールの関係を詳細に検討した（石井 1992, 11-14 頁）。

41) 行基の外来仏教思想受入れは、まず道昭が可能性を持つ。しかし行基は大野寺建立まで９カ寺を建立している（井上編 1996: pp.20）が、似た塔を築いていない。

42) 行基とも交流が深く、天平宝字 4（760）年に没した時、行基が養老 2（718）年に建立した登美院（霊山寺）に葬られている。

43) 阿部龍一は、天平勝宝 8（756）年の聖武天皇の四十九日忌に金剛智の袈裟が納められたことから、「朝廷が金剛智によって翻訳された密教経典主体の聖経類に並々ならぬ関心を寄せていたことを示している」と記し、すでに密教がかなり伝来していたことを述べている（阿部 2004, 110 頁）。

44) 唐船で彼と共に来日したのは、39 人の船師・水手だったとされている。だが彼らは、船と共に唐へ戻っているはずである。

45) 根本誠二は、天平宝字 6（762）年から天平神護 2（766）年まで道鏡が多数の密教系の経典を東大寺写経所から借用していることを明らかにした（根本 2006, 39-45 頁）。

写真出典

1：辛島 1999, 2,3 ：長谷川 2006a, 4,5,7,8：大林 1987 , 6：ローソン 2004, 9：Miksic1998, 10,11：長谷川 2006b, 12,13：Krom1927-31

Museum of Buddhist Studies NTU Digital Library & Museum of Buddhist Studies

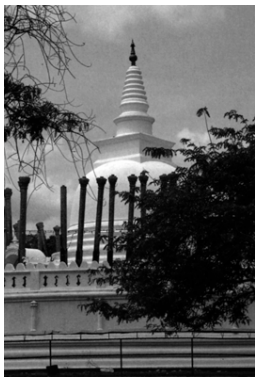
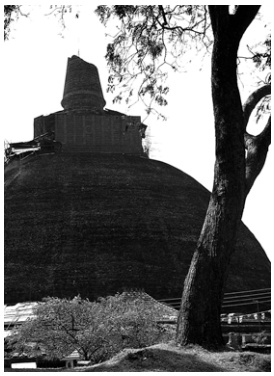
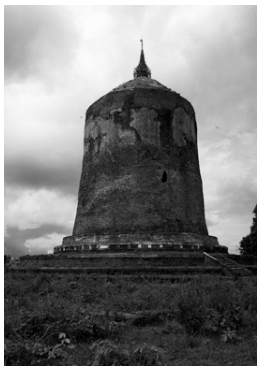




写真 1 アマラーヴァティ　写真 2 トゥーパーラマ　写真 3 アバヤギリ　写真 4 ボーボージ

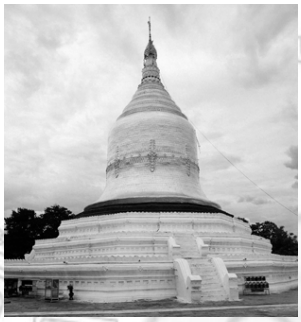
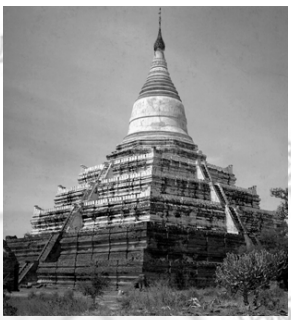
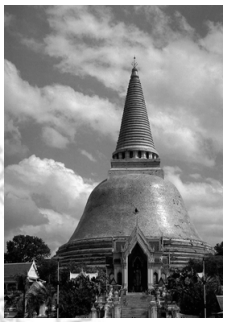
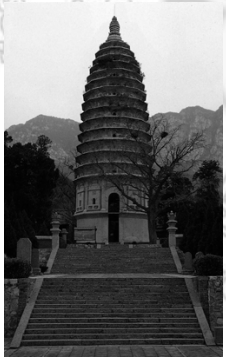




写真 5 シュリークシェトラ　写真 6 ローカナンダ　写真 7 シュエサンドー　写真 8 プラ・パットム・チェディ



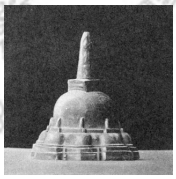


写真 9 スンガイ・マス　写真 10 嵩岳寺　写真 11 大雁塔　写真 12 中部ジャワ　写真 13 ボロブドゥール

写真 14 プグン・ラハルジョ　写真 15 同左菩薩像　写真 16 スクッ本殿

The Diffusion of Buddhist Stupas in Ancient Times

-Concerning the Relationship of Borobudur with Zuto in Nara-

Takashi Sakai

Zuto in Nara, with Doto in Sakai and Kumayama stone monument in Okayama are classified as special stupas of the Nara Age. They were constructed as stepped pyramids with an emphasis on a horizontal orientation. And these stupas, without internal space, are very different from the common Japanese stupa. Such a condition certainly has a close connection with Buddhism, because there are many reliefs Buddha images at Zuto.

Stupa, born in India in the 3rd century BC, became general object of worship for Buddhists before the formation of Buddha imagery. Sanchi stupa, the oldest, is shaped like a half sphere and built to allow worship around it. The functions of Buddhist stupas were also diffused, and shapes show a variety of styles in each cultural area.

Borobudur, in Central Java, Indonesia, is called the biggest Buddhist monument in the world, and was built during over a half century by the Shailendra Dynasty after Mahayana Buddhism was introduced from the Shrivijaya Kingdom of South Sumatera in the early half of the 8th century AD. Many Buddhism images and reliefs in Borobudur were made referencing Gadavyuha and Vajrayana/Esoteric Buddhism from Sri Lanka and East India.

However, a stepped pyramid shape without an inner space as found at Borobudur is found in neither India nor Sri Lanka. And there are no supas with similar shape in Southeast Asia prior to Borobudur. Similar shaped monuments are found only in South Sumatera etc. This type of monument, originating of Megalithic culture that predated the introduction of Buddhism continued through the Historical Age. Borobudur can be seen as a massive monument of this origin, decorated in Buddhism style.

The formation of the Huayen Tsung/Gandavyuha religion in the Tang Dynasty was accomplished due to the large role of Ijing, who stayed for a long time in Shrivijaya while traveling to India by the sea route of Southeast Asia. The establishment of Vajarayana in the Tang was achieved largely by Vajarbodhi and Amoghavajra, who came by way of Southeast Asia. Because of this, it can be thought that it was Indonesian local mountain religion, mixed into Huayen Tsung and Vajrayana, that developed into the Buddhism of Nara.

It is for this reason that both Borobudur and Zuto etc. are shaped in the form of a stepped pyramid. This is an interesting demonstration of archaeology showing the diffusion of Buddhism as a contact among long distance cultures.

Keywords:

Studied period: Ancient Age

Studied region: Indonesia, Japan, Korea

Studied subjects: Borobudur, stupa, stepped pyramid